異世界物語＋

日向 夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界物語＋

【Ｎコード】
Ｎ２４００Ｋ

【作者名】
日向　夕陽

【あらすじ】
響き渡る歌声。雪は誘われるように異世界へ飛ばされる。そこにあったのは、剣と魔法の世界。
成り行きから国を守る兵士を育てる学校（アイギス）に入隊させられ、騎士になるはめに……
はたして雪は元の世界に帰る事ができるのか……

※三人称視点・更新遅め（目標は月一程度、土日更新）・一度の更

新で二千字〜四千字ぐらい・フィクション※
※携帯閲覧推奨※

1授業―1

チャイムがなり、急に教室は静かになった。さっきまで話しをしていたのが嘘の様に、教室にいた生徒全員が静かに席に座っていた。
そして、教室の戸が開き、軽鎧を着た男が入ってきた。その表情は険しく威厳が漂っていた。

「教科書一二四五ページを開け」

男がそう言った瞬間に、教室にいた生徒全員が分厚い教科書を開いた。一人の少女を除いて……。

「おい、そこのお前。教科書を開け」

男の声が少し低くなる。

「……え？」

少女は机から頭を上げた。が、状況が理解できていないのか困惑の声をあげた。

「私の授業中に居眠りとはいい度胸だなエリア」

男は呆れた様に少女――エリアに言い放つ。

「あ、すす、すいませんっっ！」

エリアは状況を理解し、慌てて謝罪した。

「……これからは気を付けることだな。罰として、貴様にはここを音読してもらおうか」

「は、はい。闇器、呪われた武器、暗黒物質、負の塊、など表記されるが実のところはまだはっきりとした定義がない。代表的なものとしては柄から刃まですべて真っ黒な【黒の剣】、神獣を射殺した、大賢者ラムウを突き刺したといわれる【ロンギヌス】がある。今のところ発見された物は少なく全部で十満たないと言われている。」

「よし、そこまで」

エリアがある程度読み上げたところで男が言った。
エリアは男の声を聞きホッとしてため息をついた。

「エリア、闇器についてお前が他に知っていることを答えろ」

男は本を閉じて、エリアに言った。

「ええっと……人には扱えない……ですか？」

エリアが自信なさ気に答えると男は満足そうな顔をした。

「なんだ、寝ていてもちゃんと勉強しているじゃないか」

男は少し笑みながらエリアに言った。

「……すいませんアヌラス先生」

男――アヌラスの言葉にエリアは少し俯いた。

「次からは気を付ける様に。そして、闇器は人に使える様な代物ではない。昔にあった戦の……」

アヌラスの言葉でその授業は普段通りの雰囲気に戻った。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、教室からちょっとした緊張感がなくなる。アヌラスが教室から出ていくと生徒達はやっと解放された、と安堵した。

「……はぁ～」

分厚い本をぱたんと閉じてエリアは溜め息をついた。

「どしたの。溜め息なんかついて」

エリアが声のした方に向くと、そこにはリネが立っていた。

「もしかして……男？」

リネはエリアにニヤニヤしながら近付く。

「おと……こ？　ちちち、違う、違うよ」

一瞬きょとんとしたエリアだったが、次の瞬間には顔を真っ赤にした。

「なんだ。違うのか」

リネは期待ハズレの返答に肩を落とした。

「リネが期待するような事じゃないよ……」

エリアは真っ赤になった顔でリネを睨んだ。

「……次の試験の事」

エリアがそう言うとリネはまたか、と呟いた。

「大丈夫だって。エリアは筆記トップだし」

リネはわざと明るい声で言った。

「そうだけど……実技が……」

「大丈夫。自分をもっと信じてあげなよ」

リネはそう言い残して、自分の席に向かった。

「自分を信じる……か。でも……ダメだよ。どれだけ頑張っても……私には」

エリアは消えそうな声で呟いた。

休み時間と授業の始まりを知らせるチャイムが教室に鳴り響いた。

2食堂での語らい

「ただいま……」

エリアはドアを閉め、独り小さくため息をついた。

この学校……王国騎士団士官学校【騎士盾(アイギス)】には同じ敷地内に生徒寮がある。生徒寮は兵級【ランク】ごとに分けられており、それぞれに、

従騎士【エクスワイア】

序士【ファースト】

伝説【レジェンド】

失栄【ロスト】

という名称がつけられている。

位としては失栄が一番偉く、従騎士が一番低の位になっている。

エリアは従騎士の兵級である。なので生徒寮は従騎士の寮、通称【雛棟(ヒナ)】で生活している。

三階建てのその棟は、一階に付き部屋数が十つある。エリアは一階に部屋があった。

その部屋には幾つかの剣が壁に立て掛けられていて、壁には古い地図らしきものが貼られていた。一つの部屋しかないが物が整理されていて、場所をとっているのがベッドぐらいしかないくらいに広く感じられる。

「今日も疲れたな……」

ベッドにダイブし、目をつぶるエリア。

その時、木製でできた古びた扉を叩く音がした。

「エリア～。居るだろ？　飯食いに行こうぜ」

扉越しに聞こえる声にエリアは覚えがあった。

「ちょっと待って」

エリアはベッドから体を起こすと騎士盾の制服から、絹で出来た服に着替えた。

「遅いぞ」

エリアが部屋から出ると、黒い髪の少年アシラが居た。

「みんな待ってるし、急ぐぞ」

アシラは急ぎ足で生徒寮を出た。エリアもそれについていった。

生徒寮の向かいにある食堂で四人は夕食を食べていた。

「やっぱり肉だな」

がつがつと、鶏の丸焼きを食べるアシラ。

「肉だね」

そして、テーブルを挟んだ向かいでリネも同じ料理を食べていた。

「二人とも毎日凄いね……」

エリアは、二人の食べっぷりを眺めながら、サラダを食べていた。

「リネはともかく、アシラは馬鹿なだけだ、凄くない」

口が悪い少女アマルが呟いた。

「なんだよ、どうして俺が馬鹿なんだよ」

アシラは言いながら、手を動かしている。

「口に物を入れながら喋るな。いつまで経っても馬鹿だな貴様は」

アマルがアシラを睨みつける。

「別にいいじゃんよ。飯食いながら話しとかしたいし」

「馬鹿に礼儀等あったものじゃないな。アシラ、今度治療魔導師【ヒーラー】の知り合いを呼ぶから、頭を診てもらうか？」

アマルは“馬鹿”を強調しアシラを挑発するように呟いた。

「……相変わらずですね、二人とも」

エリアは二人の様子に溜め息をついた。

「よく揉める割には一緒に居るしね。あれも一種の絆なんじゃない？」

その横でリネは肉をほうばりながら答えた。

「仲がいいのか悪いのか……よくわからないですね」

エリアは手を止めた。視線の先には口論し合うアシラとアマルがいた。　二人の目にはリネとエリアは写ってないようで、互いに言い合いを続けている。誰かが止めないと延々と続きそうだ。

「あれれ？　ちゃんと食べないと」

リネはエリアの手が止まっているのに気づき、声を掛けた。心配するような声ではなく、少しからかう様にリネは続ける。

「はい、はい、はい。エリア、これ食べていいよ」

テキパキとテーブルにある料理をエリアの方に寄せるリネ。

「えっ……。こんなに……」

エリアは目の前に寄せられた料理に驚いた。どう見ても一人や二人が食べる様な量ではなかった。

「くくっ……。冗談、冗談」

そして、リネはそんなエリアの様子を見て、悪戯が成功した子供の様な笑みを浮かべた。

「もうっ、からかわないでよ」

頬を餅の様に膨らませるエリア。でも、その声は柔らかい。

「ごめんごめん。でもさ……」

リネは顔の前で両手を合わせて謝り、そして、エリアに改めて向き合う。

「最近落ち込んでたじゃん？　私なりに心配でさ……」

「え……」

エリアはさっきとは雰囲気の違うリネに戸惑いの声を出した。

「なんて言うか……エリアはやればできるんだからさ……もうちょっと、自信持ちなよ」

リネはエリアの肩に手を置き、呟いた。その顔は真剣な表情だったが、徐々に紅くなり、照れ隠しか窓の外に目線を移した。

「そうだね……ありがとう、リネ」

エリアは元気よく答えた。

「やっぱりエリアはそうじゃなきゃね。それじゃたくさん食べようか」

その答えを待っていたかの様にリネは返事をした。

3呼び声―1

テーブルには空になった皿が積み上げられていた。

「たらふく食ったな」

アシラが腹を叩きながら呟いた。

「……貴様には礼儀というものはないのか？　食堂という公共の場でその態度は馬鹿のすることだ。……そういえば貴様は馬鹿だったな」

アマルはからかう様な口調で言った。

「だから、なんでいつも馬鹿扱いなんだ！！」

アシラがすかさずにツッコミをいれた。

「馬鹿だからだ」

アマルは当たり前の様に言い切った。

「本当に仲良いのか悪いのか、わかんないね」

リネは呆れた表情を浮かべ、口論を始めた二人をちらりと見た。

「だね」

エリアは苦笑しながら呟いた。

「だいたい馬鹿って言った奴が馬鹿なんだよ！！」

「つまり貴様が馬鹿という訳だな？」

「おう！　そのとお……って違う」

二人の口論は食堂中に響いていた。が、幸いなことに、エリア達の他に生徒の姿はなかった。

「そういえばさ、次の試験。かなり難しいらしいね」

思い出した、とリネが言った。

「マジかぁー！？」

「知らなかったのか馬鹿が」

さっきまで口論を交わしていた二人は、リネの言葉に反応して大声を出した。

「ちょ、二人して煩いって」

二人が話しに入ってくると思っていなかったリネはその声の大きさに驚いた。

「わ、悪かったね」

アマルは少し俯きながら謝った。その顔にはアシラと口論してい

た時の様な表情はない。
「アマルって俺以外には優しいよな……」
小さく溜め息を漏らすアシラ。
「確かに」
「そういえば……ですね」
アシラの言葉に続いて、エリアとリネも頷いた。
「私は馬鹿が嫌いだからな」
アマルは両手を組み仁王立ちでアシラの前に出た。
「だからどうして俺がばっ」
アシラの抗議は急に遮られた。食堂の扉が急に大きな音と共に開かれたからだ。
エリア達全員が、食堂の入口に目をやった。
「よ、ようレノフ」
そこには人間のシルエットが二つあった。一人男で、もう一人は女だった。
「……アシラか」
男の方が呟いた。

「馬鹿でしたか」

女の方も続いて呟いた。

「誰が馬鹿だ」

「貴様しかいないだろう馬鹿が」

お決まりの様にアマルが言った。

「あっ？　もしかして私達お邪魔だった？」

リネは今さら、と思わせるようにレノフに問い掛けた。当たり前の様に例の二人の口論は無視して。

「そんな訳なかろう」

レノフは落ち着いた口調で返した。少し呆れた様に、疲れた様に溜め息をついた。

「食堂で馬鹿が騒いでいると聞いてな」

まったく、と小さく付け足した。その瞬間に四人は固まったが、それも一瞬だけだった。

「私としたことが……」

「あちゃー。やっちゃったね」

「ご、ごめんなさい……。ほら、リネもちゃんと謝って」

「あ、悪い悪い」

「まったくと言ってよいほどに……」

「反省の色が見えませんわね……」

四人の反応に不満しかないレノフとキャロルだった。とはいえ、エリアはきちんと謝っている。

「まったく……。騒々しい奴らよ……」

レノフは誰にも見えぬ様に小さく笑った。

ぱたん、と渇いた音をたてて扉がしまった。その部屋は生徒寮のエリアの部屋だ。

「さっきは酷い目にあったな……」

エリアは独り言を呟きながらベッドに腰を降ろした。

エリアはちょっと前の罰として食堂内を全て掃除させられた事を思い返していた。最初は皆真面目に掃除していたが、アマルとアシ

ラがまた口論を始め、結局リネとエリアの二人だけがきちんと掃除をしていた。
そして、後から来たレノフにアシラとアマルは引きずられて行った。だが、エリアはそれを知らない。リネはそれに気付いていたが。

「それにしても」

エリアは目線を自分のお腹に向けた。普段より膨らんでいる。

「今日は食べ過ぎちゃったな……」

お腹手を添えながら呟く。

「太らないよね？」

エリアは誰に問い掛けるでもなく呟いた後、ベッドから腰を上げて机に向かった。
その途中で本棚から一冊の本を取り出す。その本はかなり分厚い。表紙には、“医療魔術について？”と記されていた。

「次のテスト嫌だな……」

手に取った本を両手で抱えて呟く。

「あっ！」

エリアは、急に何かを見つけ窓に駆け寄った。窓の向こうには夜空が広がっており、暗闇の中に数え切れない程の光が存在していた。その中の光が動き、光の筋で綺麗な弧を描いた。

「流れ星」

子供の様な笑顔で窓に張り付いたエリアは、少しの間窓の外を眺めていた。

数分経過した時、エリアに異変が起きた。

「あれ……？　“コレ”なに」

それは、急に駆け巡る風景。或は、身体を通り抜けるか風。或は、時間。或は、大気に刻まれる振動。

「こんっ……な……の……知らないっ！」

エリアは急な頭痛に両手で頭を挟み、膝を着いた。

頭痛の原因が何かはわからない。しかし、エリアは確信していた。直接頭に叩き込まれた様な映像、或は、音、或は臭い、或は、痛み、それらが頭痛の原因だと。

「……ｖｅｎｉ……ｍｉ……ｆｉｌｉ……」

エリアは頭痛に襲われながらも小さく呟いた。それは途切れ途切れで、押し殺した様な声だった。

「……ｖｅｎｉ，ｍｉ……ｆｉｌｉ」

少しづつはっきりしていく声。エリアが唄うそれは物心ついた時から唄ってきた唄。

「venｉ，venｉ，……veniａｓ……ｎｅ、ｍｅ、ｍｏｒｉ、ｆａｃｉａｓ……」

エリアはそれを呪文の様に唱えた。そして、繰り返すに伴いはっきりとした“音”になっていった。

「ｈｉｃ、ｖｅｎｉ，ｄａ、ｍｉｈｉ……」

そして、それはエリアによって一言一言が紡がれて“唄”になる。

——venｉ，venｉ，　veniａｓ，ｎｅ　ｍｅ　ｍｏｒｉ
ｆａｃｉａｓ

——venｉ，venｉ，　veniａｓ，ｎｅ　ｍｅ　ｍｏｒｉ
ｆａｃｉａｓ

——venｉ，ｍｉ　ｆｉｌｉ

——venｉ，ｍｉ　ｆｉｌｉ

——ｈｉｃ　venｉ，ｄａ　ｍｉｈｉ……

全てを唱え終えると、エリアの視界は真っ白になった。

「えっ？　何？　何？」

前後左右に首を振り、身体の向きを変えて周りを見渡すが、そこは全てが真っ白だった。

4剣道―1

「メェーーッ！」

竹刀の打ち合う音と叫び声が混じり合い、剣道場はいつも異常に煩かった。

そして、その剣道場の端の方で打ち合う二人組がいた。

二人共に竹刀を構えているが、一向に動く気配がない。

そして、その二人の周りだけ、時間が止まっているかの様な雰囲気を創りだした。その光景は、凛々しくあり、少しの畏れを含んでいた。

「ドォォォッ！」

片方の男が先に動き出した。左足から前に進みもう一人の男の胴に目掛け竹刀を振るう。

しかし、男はそれを右足から半歩引き、上手く避わした。

そして竹刀を高く掲げてそのまま――

「メェェェッ！」

相手の男の面に竹刀を振り下ろした。

「痛っ、ちょっとぐらい手加減しろよな～」

面を外し、北尾が言った。

「手加減したら意味なくないか？」

雪も面を外した。

「いやいや、自分の実力を考えろって」

北尾は剣道場の隅っこの壁に向かいながら言った。

「別に大したことないって」

雪呆れた様に溜め息をつき、北尾と並ぶ様に歩いた。　二人とも片手には面と竹刀を抱えている。

「さすがは全国三位の雪さん。言うことが違うね～」

北尾は皮肉っぽく言いながら座り込んだ。雪もそれに少し遅れ、壁にもたれ掛かる様に座った。

「ん～、あんまり全国のレベルが高くなかったからな」

雪は悪びれる様子もなく言った。その顔には“どうでもいい”と北尾には見えた。

「なんだかムカツクなぁ、ていうかよ、雪なら優勝できてたよな？」

北尾は軽く雪を睨み、それから向きを変えて剣道場をぼんやり眺めながら呟いた。

「どうだろうな。まぁ、たぶんできたんじゃないか」

雪は大きく溜め息をつきながら答えた。

「他人事みたいに言いやがって。でも誰が見てもお前の優勝だっただろうな」

北尾は壁にもたれ掛かかり、天井を見上げた。

「悪かったな」

北尾を横目で見ながら雪は言った。

去年の総合体育大会の時に、雪と北尾は二人共出場した。北尾は一回戦で敗れたが、雪は難無く勝ち進んだ。

雪の試合はどれも雪の二本で終わった。周りから見てもその強さは他の選出とは桁が違った。

そして向かえた準決勝、雪は試合に出なかった。　理由は寝過ごしだった。

「試合すっぽかして三位とかたぶんお前だけだぞ」

勿体ない勿体ない、と北尾が呟いた。

「それ言われるときついからやめろ」

雪は小さく溜め息をついた。

「植木先輩！」

雪が顔を上げると、一人の後輩がすぐにそこにいた。

「一本お願いします」

後輩は頭を下げた。

「ほいほいっと、んじゃ一丁やるか」

雪はすぐに防具を身につけ、立ち上がれるった。そして、すぐに二人は構えた。

また、お互いに動かない雰囲気を剣道場の端に創り、対峙する二人。

今度は先に雪が動いた。　前に進み竹刀を奮う。後輩はそれを竹刀で受けた。が、初撃を防いだだけだった。

「メェェェッ！」

後輩は重い一撃を受け、少しよろめいた。

「せ、先輩もう一本お願いします」

そう言い構えなおした。雪も構えた。

「大丈夫か？」

「はい」

雪の問い掛けに間を空けず、後輩は答えた。雪も返事を聞き静かに構えた。

そして、渇いた音と共に竹刀が弾ける。

「メェェェッ！」

「テェェェッ！」

今度はなかなか一本が決まらず、二人の打ち合いが続いた。

「おっ、けっこう手加減してるなあれは」

二人の打ち合いを眺めていた北尾が呟いた。　しかし、それもすぐに掻き消された。

「メェェェッ！」

雪は振り下ろされた竹刀を受け止め弾き返す。後輩も一緒後ろに動いたが押し返す、鍔ぜり合いの形になった。

「中々やるな」

鍔ぜり合いを保ちながら雪が言った。

「＊こ＊来＊＊＊＊＊」

雪の耳に不意に何かが聞こえてきた。

そして次の瞬間に頭に強い衝撃を受けた。

「メェェェッ！」

雪は面を取られて座り込んだ。

「せせ、先輩大丈夫ですか？」

剣道場に居た生徒の中で、二人の試合を見ていた生徒達が驚きの表情をしていた。それは雪から一本取った後輩も一緒だった。

「ん、大丈夫だ」

雪は立ち上がりながら答えた。

「なぁ、さっき何か聞こえなかったか？」

雪は床に目線を置きながら呟く。

「え？」

後輩は自分の頬を少しツネりながら返事をした。しかし、それは質問に対しての返事ではなく、急に声を掛けられてついでた返事の様だ。

「いや、なんでもない」

雪は小さく溜め息をついた。そして、窓の外を眺めた。

「聞こえたと思うんだけどな……」

雪は誰にも聞こえないように呟いた。

5呼び声―2

確かに声が聞こえた気がしたんだけどな。
部活も終わり、自宅に向かいながら雪はそればかりを考えていた。
雪の自宅は同敷地内に道場と家がもう一軒ある。珍しい家だが、道場は形だけで、今では雪の身内の人間しか入らない状態だ。

「ただいま」

昔ながらの道場を素通りし、横にある今風のドアを雪は開けた。
ドアを開け、片足を踏み入れると、どこらかともなく包丁が飛んできた。それは、雪の頬を掠めるように通り壁に突き刺さった。

「おい、危ねぇだろ」

雪は包丁が飛んできた方向に向かい言った。

「ふん、このたわけがぁ！」

その方向から表れたのは白髪の老人だった。その老人は雪の祖父の雪房（ゆきふさ）だった。雪房は片手に日本刀を持っており、凄まじい殺気を放っていた。

「いや……、だからっていきなり包丁は危ないだろ」

雪は殺気を放つ雪房に呆れた様に呟く。

「今日、学校で一本取られた様にだな」
ふん、と息を吐きながら雪房が言った。
「げっ……」
雪は体をのけ反らせた。
「なんで知ってんだ？」
そして、不思議そうに呟いた。
「わしの情報網を舐めるなよ」
雪房は雪の顔を見て、含み笑いを浮かべた。
「という訳だ」
「どういう訳だよ……」
雪房が急に口にした言葉の意味がわからない雪は不満げに呟いた。
「わからんか？　今日はわしが稽古をつけてやろう」
「うわぁ～」
雪房の言葉に雪はめんどくさそうに呟いた。
「言っておくが貴様に拒否権はないぞ」

雪房が低めの声で呟き、そのまま外に出て行った。

「どうしてかこういう展開になるのな」

頭を抱えて雪は呟いた。　そして、袴に着替えるために自分の部屋へ歩き出した。

袴に着替えて道場に戻って来た雪に雪房が声を掛けた。

「随分遅かったな」

木刀を片手に雪房が言った。

「そうか？」

雪は返事をしながら木刀の置いてある場所に向かった。そして、その中から一振りを手に取る。　道場の中には雪と雪房以外の人間は居なかった。そのため、時が止まっているかの様に静かで独特の雰囲気を漂わせていた。

「では、始めようか……」

雪房はそう呟くと静かに構えた。それを合図に、雪も構えた。二人共袴姿で防具は付けていなかった。

両者共に微動だにせず睨み合い、隙を探る。

「ッらあァァァ！」

先に動いたのは雪だった。　右手に持った木刀を大きく振り下ろした。

「甘いわぁ！　このたわけがっ！」

雪房は木刀で、雪の一撃を弾き返した。

雪は大きく体勢を崩し、空いている左手を床についた。雪房はその瞬間を見逃さなかった。

体を少し屈めながら木刀を振り上げる。木刀は床を擦る様に、床から浮く様に弧を描き、雪の左肩に迫った。

「くっ」

雪は咄嗟に右手の木刀で攻撃を防ごうとした。

渇いた音が道場に鳴り響いた。

カランコロンと音をたてて雪の持っていた木刀は道場の端へと弾き飛ばされた。

しかし、それでも雪房の攻撃は止まない。それは、彼らがしていることがただの剣道ではないことを表していた。

雪房の間合いから、すぐに離れ、木刀を拾おうとする雪。

そして、その雪に目掛けて木刀が振り下ろされた。が、雪はそれがくることを待っていたかの様に、少し体をずらして避ける。そして、その勢いのまま足を掛けて投げた。

道場に、今までとは違う音が鳴り響く。

投げられた雪房は咄嗟に受け身をとり、素早く立ち上がり木刀を構えた。

雪はその間に木刀を拾い上げていた。

「危なかった〜」

気の抜けた様に雪が呟きながら右手に握る木刀をクルクルと回していた。

雪房はすぐに飛び掛からず、両者が再び睨み合う形になった。

「ドォォォ」

そして今度は雪房からしかけた。

その一閃は鋭く、音をたてずに雪を向かった。
「つっ」
それを雪は咄嗟に木刀で受ける。が、勢いは殺せずに後ろに下がった。
「甘いわぁ」
それを見た雪房は叫びながら再度木刀を振るう。
そして道場に鈍い音が響き渡った。

「いててて、っと」
頭を抑えながら雪は呟いた。
此処は雪の部屋であり、雪は布団の上で横になっていた。先ほどの“試合”で雪房の木刀を受けて気絶していた様だ。
「それにしても爺の奴、恐ろしいな」

雪は顔の上で右手をグーパーグーパーしながら呟く。

「いつになったら俺は勝てるのかね～」

雪は上半身だけを起こして呟いた。

雪はしばらくその体勢のままじっとしていたが、立ち上がり部屋の奥に立て掛けられている“あるもの”を手に取った。

それは日本刀だった。その日本刀は鍔（つば）の辺りが鞘（さや）から抜けないよう、包帯状の布で巻かれていた。

雪は手に取った日本刀を立ったまま眺めていた。カチャ、と音をたたせて日本刀の柄を握る。が、抜こうとはせず、大きく息を吐いた。

雪がその日本刀を元の場所に戻そうとした時だった。

「こ＊＊＊＊＊＊」

突然何処からか、あの時の声が雪の耳に入った。

「うぉ！？」

雪はいきなり聞こえた声に驚いた。

「誰だ」

部屋には雪しか居ないのだが、何処からかその声がしていた。

「＊＊＊＊＊＊＊」

「ん？」

雪は少ししてから気付いた、これが歌だということに。

急に雪は何かの違和感を感じた。

雪から見た世界が急に揺らぐ。

「ちょ、なっ」

急な浮遊感に雪は襲われた。いつの間にか雪の足元は黒い空間ができていて、雪は浮いていた。

「おいおいおいおい」

雪は手足を動かしてみるが、そこから動けない。

その間にも、世界下からは少しずつ消えていく。

そして。

植木雪という少年がこの世界から存在を消した。

6 呼び声―3

見渡す限り真っ黒の丘。見上げると、真っ白な空。その黒い大地には大小さまざまな形の白い固まりが刺さっていた。

そんなモノクロの世界を色のついた生き物が歩いていた。

「ったく、此処は何処なんだよ……」

雪は足をひたすら動かしながら呟いた。

「もう歩きっぱなしだし……」

独り言を呟き、足を止めた。此処に来てから三時間は経っていた。

「だる……」

雪はそのまま寝転んだ。その丘は真っ黒に見えるが、浅く黒い芝が生えていてふさふさしていた。

雪は顔をだけを横に向け右手に持っている日本刀を見詰めた。

その時だった。あの声が聞こえてきた。

――ｖｅｎｉ，ｖｅｎｉ，　ｖｅｎｉａｓ，ｎｅ　ｍｅ　ｍｏｒｉ　ｆａｃｉａｓ

今度ははっきり聞こえる声に雪は飛び起きた。

――venｉ，venｉ，　venｉas，ne　me　morｉ　facｉas

そして、辺りをキョロキョロと見渡すが、誰も居なかった。しかし、声だけは鮮明に響き渡っていた。

――venｉ，mｉ　fｉlｉ

「誰だ」

――venｉ，mｉ　fｉlｉ

雪の問い掛けも虚しく、その声は唄い続ける。

――hｉc　venｉ，da　mｉhｉ……

最後の声が聞こえたと同時に世界が揺らぐ。雪の足元から砕けて無くなって落ちていく。

ただ、雪だけがそこに浮いていた。

「またかよ……」

雪は覚えのある浮遊感に呟いた。

少しの間浮いていたが、ずっと下の方から白い空間が迫ってきた。

すぐそこまで上がってきた空間に雪は“ぶつかる”と思い咄嗟に腕で顔を庇うように目をつぶった。しかし、そのまま身体は通り抜けた。

「どうなってんだ」

雪が目を開けると白い空間の中だった。

「そこに居るのは誰……ですか？」

雪が振り返るとそこにはエリアが居た。

「そういうあんたは誰だよ」

雪は落ち着いた口調で言った。

「えっ、あ、私はエリア・アルケデです。貴方はどちら様でしょうか……？」

「俺は植木雪。なぁ、此処は何処なんだ」

「えっ、いえ、私もわかりません。自分の部屋にいたはずなんですけど、いつの間にか此処に……」

エリアが頭を傾げながら言った。

「自分の部屋ね……」

それを聞いた雪は意味ありげに呟いた。

「ところで貴方は何処から此処に来たんですか？」

「ん？　俺も自分の部屋からだけど」

「あ、いえ。そうじゃなくて、何処の国から来たんですか？」

「日本だけど、もしかして外国の人か？　日本語だったから気にしなかったけど、髪の毛桃色だし」

「ニホン？　それってどの辺りにある国なんですか？　私、ハルムート王国から出た事がなくて……って、どうかしましたか？」

エリアが“ハルムート王国”という言葉を出してから雪は顔に困惑の表情を浮かべた。

「あのさ……ハル……ムート王国ってなんだ？」

雪は恐る恐る、という感じにエリアに言った。

「ええっ！　ハルムート王国を知らないんですか？」

エリアは信じられない、という様に声をあげた。その様子から知っていて当たり前の国名のようだ。

「何だ、その作り話に出てきそうな国は……」

「本当に知らないんですか？　嘘とかじゃあないですよね？」
「いや、本当に知らねぇ、ていうか、そんな国何処にあるんだよ……」
「龍の嫌う地、通称アスカロン大陸です。本当に知らないんですね……」
「じゃあ日本って国知らねぇか？　原爆の」
「げんば……く？」
首を傾げながらエリアは呟いた。
「知らないみたいだな……」
諦めた様に雪が呟いた。
「え、あ、その……すいません。……それじゃあニホンから来たんですね」
「ああ、なんか唄みたいなのが聞こえて……まあ、そんな感じだ」
「唄ですか？」
「なんか知ってんのか？」
「もしかしてその唄って……」

「もしかして？」

雪が言うと、エリアは目を閉じてあの唄を歌いだした。

――venｉ，venｉ，　veniａｓ，ｎｅ　ｍｅ　ｍｏｒｉ
ｆａｃｉａｓ

エリアが歌いだすと、雪は少し驚いたが何も言わない。

――venｉ，venｉ，　veniａｓ，ｎｅ　ｍｅ　ｍｏｒｉ
ｆａｃｉａｓ

――venｉ，ｍｉ　ｆｉｌｉ

――venｉ，ｍｉ　ｆｉｌｉ

――ｈｉｃ　venｉ，ｄａ　ｍｉｈｉ…

「あんただったんだな。てか、歌上手いな」

エリアが歌い終えると、雪が声を掛けた。

「ええええっ、全然うまくないですよ、私は」

雪に褒められエリアは慌て早口に言った。それを見た雪は小さく笑った。

「わ、笑いましたね」

エリアは頬を膨らませる。それを見てまた雪は笑った。

「悪い悪い、あんた面白くて、な」

「また笑いましたね……。それとできればエリアって呼んでくれませんか？」

「へいへい。んじゃ、俺の事も雪って呼んでくれ」

「はい」

雪の言葉にエリアは元気よく答えた。そして、視線を雪の右手に握られている日本刀に移した。

「それって剣ですよね？　服装もそうですけど変わった形ですね」

くりくりとした目を輝かせてエリアが言った。

「剣じゃない。日本刀だ。てか、変わった服装って……エリアって案外失礼なのな」

雪は言いながら右手を突き出す。後半はため息混じりに呟いた。

「あ、すいません。そうですよね、ニホンではその服装が普通です

よね……」

「いや、そこまで気にしてねぇけど。それよりほれ日本刀」

「えっ。わわっ……っと、危ないじゃないですか」

エリアは飛んできた日本刀を受け止め、雪を睨んだ。

「悪い悪い」

「それ、全然反省してないですよね？」

「いや……してるかもな」

「かもじゃ駄目ですよ、まったく」

そう呟くとエリアはようやく日本刀に目を移した。

「私は剣に詳しくないからアレですけど、こんなに細い剣見たことないですよ」

自分の手の中にある日本刀を見ながらエリアは呟いた。日本刀はまだ鞘に収められたままだ。

「剣じゃなくて日本刀な」

「う、細かいです」

雪のツッコミにたじろぐエリア。

「あれ？」

「ん？」

「雪さん、これ抜けない様にグルグルにされてますよ？」

「それは、されてるんじゃなくて、わざとしてるんだよ。てか勝手に抜こうとするなよ。あと雪でいいって」

「そうなんですか……。何かあるんですか雪さん」

「……なんか段々と本性現しやがったな」

「本性？　えっ～と、私でしょうか？」

「てかお前以外に誰がいるんだよ……はぁ」

雪は漫才のコントの様に勢いよくツッコミんだ。

「それな、俺にとって特別な刀なんだ」

「特別……ですか。理由聞いてもいいですか？」

「……」

雪はエリアの問いに答えず、その場に座りあぐらをかいた。

「あ、すいません、変なこと聞いてしまって」

エリアは慌てて言った。

「ん～。……したんだよ」

「？」

雪の言葉が小さかったため、聞こえなかったのかエリアは首を傾げた。

「その刀はな、……俺が初めて人を斬った刀なんだよ」

「そう……だったんですか……」

遠くを見つめながら雪は呟く。その声は聞く者を切なく何かを思い返す様に思わせた。

「ま、そんだけだよ」

もうなんとも思ってないぜ、と雪は付け足した。

「あ、これ返しておきます」

エリアは雪の横に座り、日本刀を手渡した。

「サンキュー」

「あの、雪さんは……剣士なんですか？」
エリアが雪の方に顔だけ向けて言った。
「いや、俺の居た日本は平和だったからな。全然違う」
「平和なんですか、羨ましいです」
「……けっこう大変そうだな」
「はい。大変なんです」
言葉とは裏腹に笑いながらエリアは言った。
「……んじゃ、自己紹介も終わったし、ぼちぼち此処から出ないか？」
「じ、自己紹介だったんですか？」
「いや、まあ、そんなとこだろ」
呆れた様に雪が呟いた。
「でも、此処が何処だかわからないのにどうするんですか？」
エリアは立ち上がり、辺りをキョロキョロしながら言った。
「ん～、とりあえずエリア」

「え、ああ、は、はい」

急に名前を呼ばれたからか、顔を赤くしぴしっと起立するエリア。

「此処に来た時みたいに唄で戻れないか？」

「唄ですか……」

「……」

「……」

「……エリア？」

「……わかりません。というより唄で此処に来れんでしょうか？」

「たぶんな」

首を傾げるエリアに雪が言った。

「とりあえず唄ってみろって」

そして、雪は優しく微笑みながらエリアに言った。

「えっ……あ、は、はい」

一瞬動きを止めたエリアだったが、次の瞬間には顔を赤くした。

「……大丈夫か？」

雪がエリアに声を掛けたが、その声には心配しているというより呆れている声だった。

「だだだ、大丈夫です」

「……とりあえず唄ってみてくれ」

雪が頭を抱えながら言った。

それから数分もしない内に、白い空間にエリアの透き通るような美声が響き渡った。

7黒衣の襲撃―1

「雪さん雪さん」

「ん～」

床で寝ている雪を、エリアは揺すって起こそうとするが、雪はただ唸るだけだった。

「雪さん、起きてください」

「ん」

「ん、じゃありませんよ」

「んん」

「ゆ・き・さ・ん・起きないと……えっと、起きないと……？」

エリアは言葉の続きを探すがなかなかでてこない。

「起きないと……と、とりあえず起きてください」

「ん？　此処何処だ」

エリアの揺すり攻撃のお陰か、雪はようやく目を覚ました。

「戻って来ましたよ雪さん」

「お、エリアおはよ」

雪は目を擦りながら言った。どうやらまだ少し寝ぼけている様だ。

「え、はい、おはようございます。じゃなくて帰って来ましたよ雪さん」

「帰って？　本当か」

エリアの言葉で、雪はハッと覚醒した。そして、部屋の中をキョロキョロとした後ため息をついた。

「エリアの部屋にか……」

「そんなに落ち込まなくても」

エリアは苦笑し、椅子に座った。

「朝ご飯作ってあるので雪さんもどうぞ」

「おっ、なんか悪いな」

雪は言いながら椅子に座った。

「それ、全然悪く思ってないですよね。もう、そこは少しくらい遠慮するものですよ」

「へいへい」

机の上には、トーストとミルクが二人分置かれていた。

「朝は味噌汁とかじゃあねぇのな」

「みそしる……ですか？」

「いや、なんでもない。それじゃあいただきます」

首を傾げるエリアをよそに雪はトーストにマーガリンを塗り、噛りついた。

エリアは、ちょぼちょぼとトーストを食べながら、雪の食べっぷりを眺めていた。

「そういや、地図とか無いのか？」

口に含んだトーストをミルクで押し流す様に飲みながら、雪は言った。

「ありますよ。えっと、……ほら」

エリアは席から立つと、棚から一枚の革でできている地図を雪に渡した。

「……」

「……雪さん？」

地図を覗き込むや、いなや、顔をしかめた雪にエリアは不思議そ

うに言った。

「これ……なんて読むんだ？」

「はい？」

「これ何文字だよ……」

「ええっ？　言葉は喋れるのに！」

頭を抱える雪。それを見てエリアは驚いた。

その時だった。外が急に騒がしくなった。

「追えー！　逃がすな」

「そっち行ったぞ」

外から聞こえる声にエリアは窓へ向かった。

「どうかしたのか？」

「いえ。侵入者が入って来たみたいですね」

「そうなのか……てか、案外落ち着いてるのな」

「わ、私は普段から落ち着いています？」

「そこで、吃るな、そして疑問形にするなよ」

思わずツッコミを入れる雪だったが、日本刀に手を伸ばした。

「エリア、誰か来たみたいだぞ」

雪は落ち着いた様に言ったが、片手には日本刀が握られている。

「えっえっ？」

「開けていいよな？　開けるぞ？」

雪の言葉に戸惑うエリア、そして、壁の向こうにいる人物はその言い草からエリアの知人のようだ。

「エリア大変だぜ、侵入者が……あれ？　此処にいたのか」

アシラだった。アシラは雪の存在に気づくと、困惑しながら剣を構えた。

「おいおい、なんか剣をかまえっ」

雪のぼやきはアシラによって掻き消された。雪は鞘に収められたままの日本刀でアシラの剣を受け止めた。

「何言っているかわかんねぇけど、テメェ、侵入者だろ。覚悟しろッ」

「いや……悪いけど何言ってるんだ」

アシラの叫びも、雪の呟きも、互いに意味がわからなかった。しかし、エリアだけが二人の言葉を聞き取る事が出来た。

「ふ、二人とも止めて下さい」

「何でだ。侵入者だろ」
アシラが顔をだけをエリアに向けて言った。
「止めれるなら止めたいんだが」
続いて雪がぼやく。
「侵入者じゃないですよ」
二人の方を見ながらエリアが言った。
「……本当か？」
「……何て言ってるかわからないけど、俺は侵入者じゃないぞ」
アシラが剣を収めると、雪も構えをといた。
「アシラも雪さんも言葉わからないんですか？」
エリアが言う。
「うん」
「そう……みたいだな」
二人共頷いた。
「エリアの言葉はわかるのにな」

不思議そうに雪が呟いた。

「とりあえずエリア、C棟に行こう。侵入者を捕獲しろって命令がきてんだ」

「ああ、はい。でも、雪さんはどうしますか？」

「とりあえずエリアに任せる」

「じゃあ、侵入者捕まるの手伝って下さいね」

エリアの言葉を最後に三人は生徒寮から出た。

「雪さんの服装って目立ちますよね」

エリアが雪の袖を引っ張りながら言った。

「そうみたいだな」

「エリア、何て言ってんだこいつ」

雪の言葉が気になるアシラは、翻訳をエリアに頼んだ。

「目立つな～俺の服装。カッコイイよな、って言ってますよ」

「おいおい……」

楽しそうに言うエリアに雪は頭を抱えた。

「確かにカッコイイな」

アシラはエリアの翻訳を真に受けていた。

「てか、C棟ってまだなのか？」

「もうすぐですよ」

「エリアッ！」

エリアが雪の質問に答えるや否や、何処からかナイフが飛んできた。雪がエリアを庇う様に前に出て、ナイフを日本刀で弾く。

もちろん、鞘に収められたままの日本刀だ。

「ちっ……」

ナイフが飛んできた方を見ると、忍者のような、黒い衣の男が舌打ちをしていた。

「大丈夫かエリア」

アシラが言いながらエリアに駆け寄る。

「ええ、雪さんが守ってくれたので……」

エリアは雪を見上げた。

「大丈夫みたいだな。俺がアイツをちょっと倒してくるから、そこで尻餅ついてろよ」

そう言うと、雪は駆け出した。

「エリア、あいつ何て？」

「倒してくるから……だそうです……」

アシラの問いに、エリアは言った。否、それは言ったというより、言葉を漏らしたに近かった。

「……」

アシラは駆け出した雪を見つめながら思った。

“何者なんだ……”

自分が気付けなかった殺気に気付き、エリアを庇い、挙げ句倒してくる……。

アシラは雪を観察するように目を凝らした。

7黒衣の襲撃―1（後書き）

雪の言葉はエリアだけには通じます。
エリアの言葉は雪とその他の人に通じます。
その他の人の言葉は雪には通じません。

ややこしくてすいません。

8黒衣の襲撃―2

黒衣の男は懐から二本のナイフを取り出し構えた。その目線の先には雪がいた。雪は黒衣の男に向かってきていた。

雪に向かい黒衣の男がナイフを投合するが、雪はそれを弾く。そして、雪はそのまま走る。

再度ナイフを取り出すと黒衣の男は雪に向かい走りだした。

一気に二人の距離が縮まる。

そして、雪が振り下ろした日本刀と黒衣の男のナイフ二本とが交わる。

が、それも一瞬だ。次の瞬間には、黒衣の男のナイフが雪に向かって振るわれる。雪はそれを全部避わす。日本刀で受けず、避わした。

雪は体を低くして日本刀を振り上げた。日本刀は黒衣男の顔面に直撃した。黒衣の男はその場に倒れた。

日本刀は鞘に収められているままなので黒衣の男は気絶しただけだった。

「雪さん凄いです」

黒衣の男が倒れたのを確認してか、エリアが雪の元へと駆け寄った。

「まあな」

雪はさらりと言った。右手にある日本刀は肩を、トントン、と叩く様に動いている。

「そこはもうちょっと捻って、俺最強とか言わないんですか？」

「誰が言うか……油断禁物、だろ？」

「そうですね。雪さんは意外としっかりしてるんですね」

「その意外ってのが納得いかないんだが……」

雪は頭を抱えて呟いた。

「凄いな……」

アシラが呟いた。その呟きは誰にも聞こえないほど小さく、雪もエリアも気が付かなかった。

「とりあえずどうするんだ？」

雪がエリアに言った。

「ロープで縛って先生のところへ連れていきます？」

何処から取り出したのか、ロープを片手にエリアが言った。

「なんで疑問系なんだ」

雪は呆れた様に呟くと、エリアから渡されたロープで黒衣の男を縛り始めた。

すると、C棟の陰から声がした。

「火燕(ヒエン)がやられただと……」

その声にエリア、雪、アシラが振り向く。

そこには先ほどと同じ黒衣を纏った人物が二人いた。

「その様ですね。どういたしますか雷刃(ライジン)？」

一人は声からすると女性の様で、澄んだ声でもう一人の黒衣を纏った人物――雷刃に言った。

「……決まっている。回収するぞ。俺が相手をするから、回収は任せたぞ水連(スイレン)」

雷刃が雪達を見ながら呟いた。

「わかりました。では、お願いしますね」

水連が返事を返すと雷刃は、雪達の方を睨んだ。その目つきは鋭く、エリアは一瞬だけびくついた。

「エリアは先生とかいうのを連れてこいよ」

雪はそう言うと、鞘に収まったままの日本刀を構える。

「え、あ、はい」

慌てながら呟くエリア。そして、そのまま駆けていった。

残されたのは、四人と縛られた一人。

「さてと、言葉は通じないけど、一丁やりますか」

雪はアシラに向けて呟くと、雷刃を見据えた。雷刃は左手に剣を持っている。

すると急に雷刃が跳んだ。

一気に雪と雷刃の距離が縮まる。

振り下ろされる雷刃の剣を雪は避ける。が、雷刃の剣はそれだけでは止まらず、跳ね上がる。

「くっ」

雪はそれを受け止めざるをえなかった。受け止めた衝撃で雪の体がよろめく。

雷刃はそこへ再び剣を振り下ろした。

雪は両手で日本刀を持ち上げる形で雷刃の剣を受けた。

「重い……って」

雷刃の剣を下から持ち上げながら、雪は苦しそうに呟く。
雷刃の体は雪より大きく、雷刃の胸の辺りに雪の頭がくる。それだけの違う体格差があるなら、もちろん力にもそれだけの差がある。
だんだんと雪の体勢は低くなっていく。
膝がグググと震え、両腕も下がっていく。もう少しで日本刀が顔に付きそうだ。
「っつ、ウォォォー！」
急にガクンと膝をついた後、雪は雄叫びと共に渾身の力を両腕に込める。
「なに……」
すると、今度は逆に雪の方がだんだんと上がってくる。雷刃は戸惑いの声を隠せなかった。
下がる時とは倍の速さで、日本刀が上がる。そして、最初に雷刃の剣を受け止め位置まで上がってきた。
「ラァァ！」
次の瞬間。
雪は苦しそうな声をだし、雷刃の剣を弾き飛ばした。
「ハァ、ハァ」

雪と雷刃との間に少し距離ができた。

雪は再び構える。

しかし、その顔は苦しそうで疲労の色がみてとれる。息も荒く、肩で呼吸をしている。

「お前……いいな」

雷刃は雪を見ながら呟く。その顔には不適な笑みが浮かんでいた。

「もっと俺と戦え」

剣の先を雪に向け雷刃が言った。

その目は楽しそうに笑う。

「……ハァ、何だ」

「言葉が通じないのか……。言葉などいらないがな」

雷刃は雪に言葉が通じないことがわかるや否や、一気に駆け、雪との距離を詰めた。

すれ違いざまに雷刃が剣を薙ぎ払う。

しかし、雪はそれを避わす。

だが、雷刃の剣は再度振るわれ、雪を襲う。

雪はなんとかそれを避わして後ろに下がる。が、雷刃の攻撃がやむことはなく、ひたすら剣が雪に向かって振るわれていた。

ヒュ、ヒュ、ヒュ、っと風を切る音が絶え間無くなり続ける。

雪はそれを避わすのが精一杯で反撃できず、防戦一方になっていた。

「っとと！」

雷刃の周りを回り込む様にしていた雪は、ちょっとした段差に足をとられた。

「ウガァァ！」

次の瞬間には雷刃の一撃で雪の体は宙を舞っていた。

日本刀で受けたものの雪は吹き飛ばされ、C棟の近くにあった木製の小さな建物の壁を突き破った。

「痛てて……っと、ゲホッゲホッ」

木屑が空気中に舞い、視界が悪くなる。

「ゲホッゲホッ、……刀がない」

雪は咳込みながら、手探りで日本刀を探すが見つからない。

先ほどの雷刃の一撃で、雪の手から飛んでいった様だ。

だんだんと、空気が流れ、視界が良くなる。

そして、雪が体を上げるとそこには一本の剣が置かれていた。

その剣は、柄から刃まで全てが、息を呑むほど綺麗な真っ黒で装飾も付いていない。

「……こいつをちょっと借りるか」

日本刀の代わりにと雪はそれを右手で握る。

そして――

綺麗な音をたてて、それは引き抜かれた。

9黒衣の襲撃―3

「さてと、言葉は通じないけど、一丁やりますか」

雪がアシラに向かって言った。

「え？　いや、何だよ」

アシラは雪の言葉がわからず思わず声に出して問い返したが、雪はすでに駆け出していた。

「って、聞けよな」

雪の背中にアシラは呟いた、その時だった。

アシラに向かって何かが飛んできた。

「おりゃ」

アシラはそれにすぐ気付き、腰に掛けていた剣を抜き素早く振るった。

スバッ、と音がしてそれは切れた。

「ふ～、危なっ、つ！」

しかし、不意に剣を振るっていた右腕が引っ張られる。

アシラが右腕に顔を向けると、黒く光沢をもつ鞭が巻き付けられていた。

「こんにちは」

その声は鞭が伸びている方向から聞こえてきた。

「お前は……誰？」

「私は水連といいます」

その会話の間もアシラの右腕は引っ張られていて、伸ばされていた。

「何者だ」

「女性に何者……と聞くのは少し不粋です」

黒衣を身に纏っている水連。その顔にも黒い布が被せられていて、表情がまったく伺えない。

「え？　お前女？」

「……」

アシラの問いに少し場が静まる。

「……貴方、女性の扱い方を心得ていないようですね、調教してあげましょう」

「へ？　ウォォォォ」

水連が鞭を振り回す、アシラもそれに伴い振り回された。

「落ちてください」

「？　……がっ」

そして地面に叩きつけられた。

「痛いですか？」

水連が首を傾げながらきいた。顔は見えないが、明かにからかっている様だ。

「くっ、てめぇ」

今度は逆に、アシラが右腕を引っ張り振り回そうとした。

「なっ？」

「力不足です……」

びくりとも動かない。

「何者だお前」

「……」

水連が鞭を思い切り引っ張る。

「うぉっ」

アシラの体はそれについていく様に動いた。

そして、アシラと水連の距離が縮まった。

「女性にその様な問いは不粋だと言ったハズです」

すれ違う様に水連の蹴りがアシラの腹に入った。

アシラはそのまま弾き飛ばされる様に二度三度転がった。

「くそ〜」

そう呟きながら、左手で蹴られた所をさする。

「私はそこに転がっている火燕を助けにきました。貴方には死んでもらいます」

水連は改めて、といった感じに呟いた。

「なんだと」

地面に転がっているアシラは顔だけを水連に向けて言った。

「残念です」

言いながら二つ目の鞭を取り出す水連。

その鞭には所々に刃がついている。

「では、さようなら」

水連の二本の鞭がアシラに迫る。

しかし、それがアシラに届くことはなかった。

「だ、大丈夫ですか？」

「え？　エリアか……あれ、俺どうなって？」

痛みを覚悟していたアシラは、無傷なことにかなり動揺していた。

「大丈夫ですよ、アヌラス先生を呼んできましたから」

そんなアシラにエリアが笑顔で言った。

「アヌラスが？」

「教師を呼び捨てにするとは……ふん」

アシラの呟きにアヌラスは背を向けたまま答えた。

「アヌラス……ですか。こんにちは、私は水連と言います」

「俺は火燕だ」

水連はアヌラスに向かいそう言った。その背にはいつの間にか、

火燕が起き上がっていた。

「水連と火燕か、何者だ」

「それは言えません。それに、そろそろ私達は帰らせていただきます」

「そういう訳だ」

その時だった。

「ウォォォォ」

「ガァァー！」

不意に金属のぶつかり合う、こすれあう音がその場に響いた。

「雷刃！」

「雪さん！」

水連とエリアの目線の先には、激しく打ち合う、雷刃と雪の姿が合った。

雪は相変わらず回り込む様に体を動かし、剣を振るう。

それを雷刃が受け止める、その光景は見ている者達の動きを止めた。

「あいつ……」

アシラはなぜだか、そこから目が離せなくなっていた。

今までより一際甲高い音をたてた後、雪と雷刃は距離を置いて睨み合った。

「これだ……。お前の様に強い奴を探していた。死ぬまで付き合え」

雷刃が言った。

「ハァ、……きついな」

それに対して雪は体力の限界が近づいているのが見て取れる。

「雷刃、ここは一度退きますよ」

「何熱くなってるんだあいつ」

雷刃に駆け寄った二人が背中に声を掛ける。

「……どうしてもか？」

「……絶対にです」

水連の言葉に雷刃はため息をついた。

「雪さん大丈夫ですか？」

「正直……きつい」

駆け寄ってきたエリアの言葉に雪は返事をした。だが、その眼は終始雷刃を睨んでおり、いつ襲われてもいいように剣を構えていた。

「楽しくなりそうだったんだがな……」

雷刃は構えを解き、振り返る。

「？」

雪はそれを不思議そうに睨んだ後、雷刃の行動の意味を理解したのかその場に座り込んだ。

「アヌラス先生、追わないのか？」

黒衣の三人が逃げた方向を見ながらアシラが問い掛けた。

「追えないのだよ、お前達が足手まといでな」

アヌラスは呆れた様に呟いた。

「奴らの追跡は序士に任せるとして……貴様達、ちょっと来てもらおうか」

「げっ」

アヌラスの呟きにアシラは不満の声をだした。

１０確認

「それでエリア、そいつはなんだ？」

「雪さんです」

「いや、そうで「雪さんです」

「……」

応接間の様な部屋でアヌラスとエリアが何やら言い合いをしていた。

アシラはその様子を眺めていた。

雪はその横で日本刀を使い、肩を叩いていた。

「名前を聞いているのではない」

アヌラスはそう言うと雪の方を見た。

「こいつは何者なんだ」

その言葉に雪は首を傾げた。

「確かに、こいつなんだろ」

その横でアシラは雪を不思議そうに睨んだ。
「で、改めて聞くが、こいつは何者だ。ごまかさずに全部話せ」
アヌラスは両腕を組み、ソファーに深く腰掛けた。
「ええっとですね……」
エリアはアヌラスにこれまでのいきさつを話した。
雪と出会ったこと、唄って帰ってきたこと。
アシラが途中から頭を両手で抱えていた。
雪はそれを不思議そうに眺めていた。
「……信じられんな」
アヌラスは固い表情のままで呟いた。
「でも本当なんですよ」
目と表情で、嘘ではないとエリアが訴えた。
「てことは、エリアが雪を召喚したってことか？」
「そういうことなんです……かね」
突如話しに入ってきたアシラの言葉に、エリアが自信なさげに呟いた。

そんなエリアを見たアヌラスの表情が曇る。
「……じゃあ本人に……雪とやらに直接聞こうか」
仕方がない、という感じに呟き席を立つ。
「え、でも言葉が……」
そんなアヌラスを見て、エリアはバツが悪そうに呟いた。
「それなら大丈夫だ。エリア、雪と一緒についてこい」
「アヌラス……先生、俺は？」
「お前は勉強でもしていろ」
「うげ」
その言葉にアシラが不満げにぼやく。
「ほう、文句を言うか？」
不適な、不気味な笑みを浮かべるアヌラス。
「いや、やりますやります勉強楽しいぜ」
アシラは冷や汗を流しながら、部屋を出ていった。
「……なんだこの状況？」

雪が呟く。

その顔には困惑の色が見て取れた。

「それでアヌラス先生具体的にはどうするですか」

雪の言葉はエリア以外には通じない。

それはアヌラスにもわかっていた。エリアを通し話しをする。それでもいいのだが、アヌラスには考えがあった。

「まあ、……ついて来い」

任せておけ、アヌラスの目がそう訴えていた。

「雪さん行きますよ」

「行く？　何処にだ？」

「それは……神のみぞ知る……です」

「……意味わかってるか？」

ガチャリと音をたて扉が閉まると部屋の中は急に静かになった。

が、逆に通路は騒がしくなっていた。

１１魔術師の部屋（前書き）

このこの話から、作風が変わる……かも知れない。

11魔術師の部屋

「何処に行くんだ？」

「……わかりません」

二人はアヌラスの後ろを歩きながら。

「でもここは職員棟ですね」

「職員棟？」

「ようするに、先生達が泊まっているところですよ」

「なるほどねぇ～」

肩にのせた日本刀を軽く動かしながら雪が呟いた。

「というかここ……」

雪がそこで天井を見上げる。

「どうしましたか、雪さん」

その行動にエリアは首を傾げた。

「今さらだけどな、此処何処だ」

「此処はで「おい少し静かにしろ」

エリアの言葉は途中でに遮られた。

アヌラスが二人の前を歩きながら、前を向きながら言葉を発したからだ。

「雪さん少し静かに、してください。って言われてますよ」

小声でエリアが雪に言った。

「はいはい……って、俺だけ？」

雪は面倒くさそうに呟くと、ため息をついた。

「この部屋に入るぞ」

通路にある一つの扉の前でアヌラスは足を止めた。

それを見たエリアも足を止め、雪も続いた。

三人が部屋に入る。

その部屋の中は散らかっていた。

試験管や何らかの実験に使用されるだろう器具、怪しげな煙りを出す液体、積み重なっている本の山。

とても人が住んでいる空間には思えなかった。

「おいレビカド。いるか」

部屋の入口、もとい、安全地帯から、散らかり放題の部屋の奥に向いアヌラスが言った。

「お～、アヌちゃんか。おるで～」

すると、独特さを感じさせる言葉が返ってきた、が姿が見えない。

「レビカド、どこにいる」

何が気に入らなかったのか、アヌラスは少し怒り気味に声をあげた。

「そない怒らんといてや。あれ、この子らわ？　アヌちゃんの生徒かいな」

「ええっ！？」

「……おいおい」

笑顔の少女が本の山の中からひょこっと、出てきた。

それに対し、エリアは驚き。雪は呆れた。

「そうの通りだ。が、アヌちゃんはやめろ」

「まあまあ、そない言わんといてや」

本の山から現れた少女、もといレビカドという人物は短い金髪と

紅い瞳、少女の様に小さい身体をしていて、服装は大きな帽子を被り、藍色の衣を纏っていた。

それはいかにも、魔術師、或は、魔女を思わせる格好だった。

「こんにちは。えっと……」

「うちはレビカドや。エリアちゃんやな。よろしく～」

自己紹介をしようとしたエリアが口を開いたが、レビカドが逆に自己紹介をしだした。

「ええ、はい」

独特の喋り方をするレビカドにエリアは戸惑いながら答えた。

「ほんでこっちの子わ？」

レビカドは首を傾げながら雪を指差した。

指を差されたことで、言葉が通じていない雪でも状況を把握したのか、めんどくさそうにエリアを睨んだ。

「雪さん？」

レビカドにつられて首を傾げながらエリアが言った。

「ちょっと、エリアちゃん。なんで疑問形なん？」

「ああっ、すいません。雪さんです」

「いや、そない慌てんでもええよ」

あたふたと慌てるエリアを見て、レビカドは少し困った表情を浮かべた。

「雪ちゃんか。……それでアヌちゃん。何の用なん？」

言いながら、レビカドは本を重ねて作られている椅子……要するに、本に腰掛けた。

「アヌちゃんはやめろ」

「すまんなぁ、それじゃアヌラスちゃんわ駄目かいな」

「アヌラスだ」

アヌラスとレビカドの身長差はかなりある。

もちろん、レビカドの身長が低いのが原因なので、エリアがアヌラスの代わりをしても、雪がしても同じぐらいだ。

だからか、二人がやり取りしているをはたから見ると、子供と大人が言い合っているようだった。

「冗談やて、ほんで何の用？」

そろそろ本題に入ろうか、とレビカドがアヌラスを見据えた。

「実は頼み事があってな」

頼み事、と聞いた瞬間にレビカドはキッとアヌラスを睨みつけた。
が、幼い顔つきのためか、子供が拗ねた時の表情にしか見えない。
「頼み事？　変なこと違うやろな？　面倒は嫌やで」
「簡単だ」
雪の肩にアヌラスは手を置いた。
「こいつに、雪に“言語相互共有魔術（スペルシェア）”を掛けろ」
「えっ」
アヌラスの言葉にエリアが驚いた。
「エリアちゃんどうかしたん？」
レビカドは顔だけをエリアに向けた。
「その“スペルシェア”って何ですか」
エリアは興味津々、といった感じに目を輝かせてレビカドに迫る。
「エリア、ちゃん。ちょ、ちょっと近いで。ちょいと離れや」
いつの間にか二人の距離が縮まり、互いの息がかかるぐらいに近くなっていた。

「ああっ、すいません」
エリアは少し慌てながら、赤面しながら頭を下げた。
「おいおい、何やってんだよ」
横にいた雪が呆れた様に呟いた。
「うっ」
エリアは一瞬雪を睨んだが、再度頭を下げた。
「いや、そんな頭下げられんて。かしこまり過ぎやで」
レビカドが本の椅子から降りて、エリアに近づいた。
「でも、失礼しました」
エリアはエリアで、レビカドの顔を見てまた、頭を下げた。
「あの〜」
頭を上げると、エリアが小さい声で呟いた。
「ん？　なんや」
「レビカドさんって、もしかして万能魔術師で有名なあのレビカドさんですか」
「は？」

エリアが“魔術師”という単語を口にした瞬間、雪は情けない声を出した。

「よう知ってるなあ～、その通りや」

えへん、と無い胸をはるレビカド。

「凄いです」

エリアは目を輝かせながらレビカドを見ていた。

「で、してくれるのか？」

このままでは、話が進まないと、アヌラスがレビカドに言った。

「ん～」

それを聞き、首を傾げるレビカド。

その顔をには意地悪な笑みが浮かび上がっていた。

「どうしたろかなぁ～」

「み、見たいですっ」

「へぇっ！？」

アヌラスをからかうつもりでいたレビカドだったが、不意に聞こえたエリアの言葉に驚いていた。それはアヌラスも一緒だった。

「見たいです！！」

子供が母親にねだる様に、エリアが宣言した。

それを若干引き気味に三人が見ていると、雪が動いた。

「ちょっといいか」

雪がエリアの衿を引っ張った。

そして、アヌラスとレビカドの二人から少し離れた位置まで来た。

「なんです雪さん」

首を傾げるエリア。

「ま、ま、まままま」

雪は焦って台詞を噛んだ、というよりは、聞きたくない事を、無理矢理聞いている様だった。

「ママ？」

「いやいや、ま、魔術師ってなんなんだ」

「魔術師を知らないんですか！？」

「……知らなねぇ」

目を泳がせながら雪が呟いた。

「てかよ、魔術師って何するんだ？」

雪は大体は解っていた。

それでも質問したのは違う答を望んでいたからかもしれない。

「もちろん、魔術を使って戦ったり、作ったり、調べたり、治療したり、今では欠かせない戦力ですし、種族によって魔術を使えなかったりしますが、今の時代では大半の人が使用できます。でも魔術を使える人数が多いだけに魔術師になるのは難しいんです、魔術使い、魔術師、魔導師と位が上がるにつれてその人数も少ないですから。基本的に魔術は才能ですから努力しても魔術使いから上がれない人が多いんですよ」

一度口を開けると、エリアは一気に語り始めた。

「ま、魔術ってなんだ」

「魔術も知らないんですか！！」

「まあ……な」

「仕方ないです、ええっと、魔術とは己の魔力で使用する術式に伴った現象を世界に干渉させることで発動、或は実現させることです」

説明し終えると、エリアはえへんと胸をはった。

「嘘だろ」

カチャ、と音をたてて日本刀が雪の右手から落ちた。

「う、嘘じゃないですよ。簡単に言うと魔力を使って術式を発動させることが魔術です」

「いや、そっちじゃない」

雪は即座に否定すると、呆れた様に、諦めた様にため息をついた。

「ええっと、どうかしたんですか？」

エリアは雪の様子がおかしいのに気付いた。

「いや、な……此処さ」

静かに雪が口を開いた。

「どう考えても異世界だな」

「はい？」

雪の呟きにエリアは情けない声を出した。

雪は魔術という単語が出てきたことで初めて、やっと此処が異世界だということを知った。

今までは地球の何処かにある、何処かの国。

雪はそう思っていたらしく、日本に帰ることなんか簡単だろう、そう考えていたみたいだ。

「え、ええ！？　異世界から来ちゃったんですか」

エリアの叫び声が散らかりっぱなしの部屋に響き渡った。

12アヌラスと雪の面談

異世界……異なる世界と書いて異世界。

魔術と呼ばれる術がある事だけで、雪のいた世界と此処は異世界だと言える。

雪のいた世界では、物理の法則は絶対だった。

いや、絶対だ。

この異世界に存在する魔術にも何かしらの法則はあるかもしれないが、確実に、それは物理の法則を無視した代物だ。

そして、それは雪のいた世界の否定でもあった。

「ほな、いくでぇ～」

レビカドが両腕をブンブンと振り回しながら言った。

「我、汝らの絆となりて、汝らの言づてを任された者なり」

呪文を唱え、“詠唱”に入るレビカド。

部屋の雰囲気が一気に変わった。

レビカドの体の回りに光り輝く文字が、鎖の様に纏わり付く。

それによって、先ほどまでは、人が住んでいるのかわからない部屋――という印象だったが、エメラルドの様な、淡い緑の光に照らされ、神秘的な雰囲気をかもしだした。

「我が運ぶは、汝の思い。我は汝らを繋ぎとめる者なり……『スペルシェア』」

「うぉっ！？」

詠唱が終わった瞬間、雪の体が先ほどと同じ、淡い緑に包まれた。

それに反応にした雪が、顔を隠すように腕を上げた。

「眩しいじゃねぇか」

目を開け、そう呟く。

雪の言葉を聞き、レビカドがアヌラスにニンマリと憎たらしく笑みをうかべた。

「成功やん！！」

子供の様にはしゃぐレビカドは、文字通り子供みたいだった。

外見だけではなく中身も、である。

「あれ」

そして、子供の様な声に雪が反応した。

「ん～、言葉がわかる……のか」

少し戸惑い気味に、自分自身に言い聞かさせる様に呟いた。

そう、雪にもレビカドの放った言葉の意味が、この世界で標準的に使用されている言葉が通じる様になっていた。

「さっすがうちやな～」

「す、凄いです」

無い胸を自慢に張るレビカドと、先ほどの魔術に目を輝かせて感激するエリア。

「……」

アヌラスはそんな二人を無言で、少しだけ呆れた様に眺めていた。

「おい、雪……だったか？」

そして、目線をずらし今だ混乱気味な人物の名前を呼んだ。

「ん、ああ」

こちらに来てから、エリア以外に名前を呼ばれたことが、雪にはなかった。

そのせいか、アヌラスの声が、自分を呼ぶものだと雪は一瞬わからなかった。

わかったのは数十秒経過した後だった。

「なんだあんた」

雪は顔だけをアヌラスの方に向けた。

「アヌラスだ。やっと話ができるな」

「そうだな」

心底疲れた表情を浮かべたアヌラスに、雪は軽く頷いた。

「それじゃ自己紹介をしろ」

「俺の名前は植木雪……ってだけじゃあ駄目か？」

「駄目だな。貴様が何者なのか。じっくり聞かせてもらう」

雪にずんずんと迫る。兵士を育てる学校の教師を勤めているからか、いや、だからだろうか。

その姿には、異常な迫力と威圧感があった。

「……やばそうなおっさんだ」

特に焦った様子もなく諦めた様に呟いた。

「おっさん……だと」

アヌラスはおっさんという単語に反応した。

怒りを堪えているのか、その表情は険しい。

「マズったな」

何か失敗したかの様に、雪が言った。

「つまり貴様は別の世界の人間で学生、という訳だな」

「ああ、そうだ」

先ほどの散らかり放題の部屋と違い、何もかもが整理整頓された部屋に二人はいた。その部屋はアヌラスの私室で、高級感が漂う木製の机や鎧、壁には絵画が飾られている。

「もういいか？」

疲れた、と雪が目で訴える。

二人はかれこれ二時間以上話しをしている。

「まあ待て」

が、アヌラスはまだ聞きたいことがあるのだろう、続行する気のようだ。

「これから貴様はどうするんだ？」

「どうする……ってもな」

雪は他人事の様に呟いてから、考え込む動作をした。

「てか、俺に対しての処分とかないのか？」

考え込んでいた雪が顔を上げた。

「どういう意味だ」

アヌラスが問い返した。

「いや、なんつーか。俺って異端者だろ。あんたらからしたら信用できないだろうし。刑罰とかあるんじゃねーのか？」

日本でいうなら不法侵入だし、と呟いた。

「それなら気にするな」

だが、雪の言葉に対してすぐに返事が返ってきた。

「最初はそう思っていたが……気が変わった」

「……最初は思ってたのかよ」

雪が呆れた様に呟いた。

「刑罰はない。それで、貴様はどうするんだ？」

「どうする……ってもな」

雪がこの世界に来たのは四時間ほど前だ。

異世界に来て四時間でその世界を理解するのは難しい。当たり前だろう。

それに雪の場合は　異世界に呼ばれた理由という理由がある訳でもない。

魔王を倒して下さい、とか、世界を救う救世主とか、作り話によくある“召喚”のシチュエーションではない。

自分で望んで来た世界ではなく、どちらかというと“被害者”として、エリアに召喚されたのだ。

することがある訳がなかった。

「では質問を変えよう」

雪に目的がない、或は理由がないことはわかってる。

そう思わせる口調で、仕草で、或は雰囲気をかもしだしながらアヌラスは続ける。

「貴様はどうしたいんだ？」

アヌラスが雪の眼を真っ直ぐと、睨みつける様に向き合った。

雪は一瞬だけキョトンとした表情を浮かべたが、アヌラスから目線を外した。

「とりあえず元の世界に帰える……いや、帰りたい……だな」

「そうか、……なら「だけどな」

言葉を遮り、雪は少し強引に続ける。

「来ちまったもんはしょうがねーし」

不満げに、愚痴の様に。

「とりあえず、元の世界に帰る方法を探しながら、この世界で生活してみたい……ってとこだな」

雪は言いながら、席から立った。

「話はまだ終わっていないぞ」

アヌラスが部屋から出ようと歩きだした雪に言った。
「話が長すぎんだよ」
雪はだるそうに呟き、くるりと扉からアヌラスの方に体の向きを変えた。
「で、何かあんのか？」
「貴様には行くところがないだろう」
今さらに、本当に今さらな問い掛けだった。
そんなところがあるはずもなかったが、雪は返事をせずにいた。
「行くところがない様なら、此処に世話になる気はないか？」
「そりゃ……できるなら……それがいいけどな」
納得がいかないのか、歯切れが悪い。
「断る理由もないだろう？」
「ことがうますぎて怪しいんだが」
「何も心配することはない」
そこで一度、雪は考える。考えるが、他に思い浮かぶ考えもない。
「んじゃ、世話にならせてもらいますか」

仕方なく、といった感じにアヌラスの意見に頷いた。

「それで、あんたの名前は」

「アヌラスだ」

「んじゃよろしくなアヌラス」

そう言って、手を差し延べる。

「もう少し、礼儀をわきまえろ」

皮肉を言いつつ、雪の手を握り、握手した。

13　レビカドと雪―上

「訳わかんね～な、此処」

中世ヨーロッパによくありそうな建物の中で雪は呟いた。

雪は先ほどから同じ場所をうろうろしている。

もちろん、ちゃんとした目的地はあり、ただぶらぶらしているのではない。

ではなぜ同じ場所をうろうろしているのか。

それは此処、騎士盾（アイギス）が広すぎる、というのと雪が方向音痴という二つが原因だった。

つまり、迷子になっているのである。

つい先ほどのアヌラスとの話を終えた雪は、従騎士（エクスワイア）の寮である雛（ヒ）棟（ナ）の中のエリアの部屋を目指していた。

今日来たばかりなので、迷子になるのが当たり前と言えば当たり前だが。

「おっ、雪ちゃんやない」

雪が適当に歩いているとレビカドにばったり出会った。

「あんたさっきの……」

そこまで言って口が止まる。雪の目の前にいるレビカドが言葉が通じる様にしてくれた本人なのだが、雪はそれをはっきりは知らない。とは言え、何となくはわかっている様だが。

というのも、言葉が通じる様になってからアヌラスとしか話をしてないからだ。なので、レビカドの名前すら知らない状態だ。

「嫌やな、レビカドって呼んでや」

「わかったよ、レビカド」

雪は返事をしながら、助かったと内心で安堵した。

「うんうん、それでこんな所で何しよん？」

レビカドが辺りを見回す。二人がいるそこは、　古びた、今にも壊れそうな建物の近くにある、人気のない庭だった。

手入れされていないのか、草が生い茂り放題だ。そのせいで雪の膝から下は、雑草の海に沈んでいる。レビカドに至っては、腰よりちょっと下ぐらいから、雑草に呑まれていた。

「いや、道に迷っちまってな。雛棟（ヒナ）って何処にあるか知らないか？」

雪がアヌラスとの会話を終えてから約三時間が経っている。つまり、三時間同じ場所をうろうろしていたことになる。

そのせいか、雪はだいぶ疲れているようだ。

とは言え、今日起こった出来事からすれば仕方ないことだろう。

「知ってるけど、何でこんな所におるん？　全然方向違うで」

「いや、だから迷子なんだ」

雛棟（ヒナ）と今二人がいる場所――旧C棟は真逆の位置にある。普通に考えて、雛棟（ヒナ）に行こうとして、旧C棟に着くことはありえない。

レビカドが疑問に思うのは仕方ないけれど、雪はかなり、重度の、やり手の方向音痴なのだ。

「本当に？　それはそれで凄いなぁ」

驚きの表情を見せるレビカドに、雪は若干拗ねた様な表情浮かべた。

「んで、雛棟（ヒナ）っつ～のは何処にあるんだ？」

「えっとなぁ、あっちやな。うちが案内してあげるわ」

「悪いな」

雪は、口ではそう言いながらも、案内される気満々だった。

そんな雪を見て、苦笑をレビカドは浮かべた。

「なんだよ」

「なんでもないよ、ほな行こうか」

そう言うと、レビカドは歩きだした。

雪もそれに続く。雑草の中を掻き分けながら進むレビカドに、雪は何も言わずに、黙っていた。

が、そこで雪はある疑問を抱いた。

「なあ、あんた」

「うちはレビカドやで」

雪の言葉に、レビカドはすぐに言葉を返した。

「……レビカドはあんな所で何やってたんだ？」

旧C棟は、騎士盾（アイギス）の端にある。今では誰も使用していない建物で、そのため、名前に“旧”という字が入っている。

旧C棟に変わるC棟が建てられ、取り壊されるはずの建物だった。

「ああ、それはな」

歩みを止めて、レビカドが雪の方へ向き直る。少ししか歩いていないが、旧C棟からは離れたらしく、ここら辺はもう雑草がない様だ。

「うちの家なんよ」

レビカドは、万能魔術士や万能魔女等と呼ばれるほど広く多い魔術を扱える。さらに新しい魔術を開発する魔術士でも有名だった。しかし、反対に実験の度に建築物を破壊する魔術士でも有名だ。

なので、使用しなくなった旧C棟をレビカドは譲り受けて、そこで生活、或は実験していた。

「んじゃ、庭の手入れぐらいしとけよ」

特に気にならないのか、興味なさげに雪がぼやいた。

「今度魔術で綺麗にしとくわ～」

返事をしつつ、レビカドが内心、焼け野原をつくろうと考えているが、雪は知らない。

「そういえば、魔術ってのは俺でも使えるのか？」

何かを思い出したかの様に雪が切り出した。

「……雪ちゃんは、異世界から来たんやったよな？」

あくまで確認する様にレビカドが言った。その表情は真剣で、いつものレビカドではなく、魔術士のレビカドのものだった。

「まあな」

「ほな魔術について教えとくわ」

「いや、使えるか使えないかだけでいいって」

長話になるのだろうと雪が断るが、

「いや、聞いときや」

と、レビカドが話を始めた。

「ちょっと長くなるんやけど、その前に確認な。エリアちゃんからどのくらいまで魔術について聞いとるん？」

「魔力を使って発動する術だろ？　んで、生まれつきの才能で決まる……だったかな」

「まあそうやな。んじゃ説明するわ。魔術っていうんわ、さっき雪ちゃんが言った通りや。細かく話そう思ったら細かくなるからとりあえずそれでいいわ。でや、エリアちゃんは才能って言よったけどな、あれは血筋や」

長話をし始めたレビカドに雪は諦めたのか、近くに座り込んだ。

「血筋？」

「そう、血筋や。なんで血筋なん？　ていう話なんやけど、この世界には五種類の人間がおってな、魔術が使えるんと使えないんとはっきりわかれてたんや。ちなみに五種類の人間のどこが違うか言うたら、まあ人種やな」

日本の高校教師が授業中に教室をうろうろする様に、レビカドも雪の前を、さながら教師の様にうろうろしている。

「つまり、血筋で決まるんだな？」

「そうや。最近は混血がほとんどなんやけど、魔術が使える種類の血が濃い人間は魔術がバリバリ使えるんや。まあ、絶対やないけん、例外もおるけどな」

「んじゃ、俺は使えないんだな？」

雪が残念そうに……という訳でもなく、関心なさ気に呟いた。

「あら、落ち込まんの？」

そんな態度が意外だったのか、レビカドが意地悪げな笑みを浮かべた。

「別に。最初から使えないだろうって思ってたし、別に使いたい訳じゃないからな」

雪にとって、魔術は慣れ親しんだ力ではなく、馴染みのないものだ。それに、そんな力がなくても元の世界に帰ることができれば雪にはどうでもいいことだった。

「珍しいなぁ」

「そうか？」

「まあ、雪ちゃんには術技（アーツ）がお似合いやしな」

「あ、術技（アーツ）？」

魔術と同じぐらい雪にはわからない単語がレビカドの口から出てきた。　雪はそれをオウム返しの様に復唱した。

「さっきの話の続きやけどな、魔力だけなら皆誰でも持ってるんよ。魔術が使えん人間ってのは魔力を魔術に出来ん人間なんよな。ほんで後の人間はその魔力を技に使うんよ。技っていってもいろいろあるけどな」

この世界では、生き物あれば魔力を皆が皆、所有している。人間も動物も魔物も、である。

「なるほどな」

レビカドの説明で納得したのか、雪は立ち上がった。

「つまり、魔力とかやらで技を発動させるんだな？」

「そうやな」

雪の言葉に両腕を組み、頭を縦に振るレビカド。

「んじゃ駄目だな」

「え？」

ため息をついた雪が、ゆっくりと歩きだした。レビカドはその行動に思わず困惑の声をあげた。

「どど、どしたん？」

すぐさまに雪に駆け寄る。

「いや、俺には魔力とかそういう類いの何かは、一切ないんだよ」

と、だるそうに雪が呟いた。

それは、雪がいた世界――日本では当たり前だ。作り話や神話等に魔法使いや魔女といった単語は出てくるが、実在はしないだろう。

中には超能力を持った人間もいるらしいが、魔法とはほど遠く、かなり胡散臭いものがある。

つまり、雪に魔力という魔力はないのだ。

「いや、そんなことないやろ？」

レビカドは慌てた様に返す。レビカドからすれば、常識をひっくり返すほどの大ごとなのだ。

「いや、たぶんない」

雪はレビカドとは違い、慌てた様子もなく素っ気なく返す。

「いや、ん、でも」

その言葉を受けレビカドは深く考え込だ。

「なあ、あと一つ聞いていいか？」

雪はレビカドの方に振り返らず、明後日の方向を見たまま問い掛ける。

「……ええよ」

返事はしたが、レビカドは先ほどの雪の言葉が納得いかないのか、かなり深く考え込んでいる。

「召喚について教えてくれないか？」

13　レビカドと雪―上（後書き）

ちなみに私は超能力とか信じません

……どうでもいいですね

14　レビカドと雪―下

「召喚についてか。う～ん難しいなぁ」

レビカドは、頭を抱えながら唸った。外見上子供、もとい小さな女の子なので凄く可愛いが、本人は至って真面目である。

「どういうことだ？」

雪はそんなレビカドの態度に疑問を抱いた。

それは、かなりの、それも魔術について博識なレビカドが頭を抱えるという行動への疑問だった。

「いや、召喚って言うんわ、この世界では珍しいことなんよ」

頭を上げたレビカドが雪を見据えた。

「雪ちゃんのおった所がどんなんかはわからんけどな、こっちじゃ召喚って言うは昔話とか、それこそ伝説とか言い伝えとか伝承とか。そのぐらい稀な出来事や。……いや、事実、今までに召喚があったかも疑わしいぐらいや」

レビカドは真剣な表情で言い切った。

雪はそれを無言で、面倒そうな表情をしながら聞いていた。

――思っているより帰るのは難しいかもしれない。

目の前にいるレビカドに聞こえないよう、雪は心の中で、自分に呟いた。

もちろん、楽観的に物事を見ていた訳ではない、しかし、前例がないというのは予想外だったのだろう。

「一応なぁ」

と、そこでレビカドが付け足す様に呟いた。

「召喚術はあるよ。まあこれは、召喚獣っていう、式神やら使い魔やらを呼び寄せるってもんなんやけど」

レビカドによる講義はまだ続いている様だった。

「ふ～ん、で、それってどう違うんだ？」

「まあ、召喚と召喚術の違いは曖昧なんよ。まあうちは、永続的か一時的かっていうのと、召喚が“何か”を“喚ぶ”っていうのに対して、召喚術は“召喚した対象”を“力として使役する”。っていうのを定義にはしてるんよ」

「なるほどねぇ～」

納得したのかしてないのか、どちらともに解釈できる返事を雪はした。

「ほんまにわかったん？」

レビカドは納得してないと解釈したのか、気になった様だ。
「だいたいはな。てゆーか、そろそろ行かないか？」
「……そうやね」
レビカドの呟きで二人は足を動かす。
気が付けば夕方らしく、暁色の空が二人を、世界を照らしていた。
幸いなことに、この世界は雪のいた世界と似たような環境で、四季があり年がある。そのどれもがだいたい同じだ。
が、雪がそれを実感するのは先の話だった。
「雪ちゃんは凄いなぁ」
歩みを止めずにレビカドが言った。
雪も歩みを止めず、ひたすらにレビカドの後ろについていく。
「突然異世界に飛ばされたのにかなり冷静やん。なかなかおらんで。うちなら発狂しとるかもや」
「仕方ないしな」
レビカドの言葉に雪は動揺せずに、ため息混じりに呟いた。

「異世界に飛ばされた、って考え込むぐらいなら異世界で生きる。考えるより動けってのが俺の考えだ」

と、雪は前を歩く小さな背中に問い返した。

「現実主義なんやな」

「まあな。悩んだり落ち込んだりしたところで現実はかわらねぇしな」

満点とまではいかないが、軽く微笑みながら雪が言った。

「エリアちゃんのことは怨んでないん？」

「ん？　いや、わざとじゃあねぇだろうし別にだ」

「えらいスッキリしとんやな」

「そうか？」

「そうや、スッキリしすぎや」

レビカドは歩みを止めずに、そのままの状態で言った。

「悪かったな」

雪は、言葉ではそう言っているものの、表情はいたずらを思いついた子供の様な笑みを零した。

「そういえばこれからどうするん？　なんやアヌちゃんと話しよったみたいやけど」

今思い出した様にレビカドが呟いた。

「アヌラスちゃんって……おいおい」

呆れた表情を浮かべ深くため息をつく。

つい先ほどまで雪と話していたアヌラスは威厳の漂う人物で、“ちゃん”という言葉など到底つきそうにない。

けれど、雪の目の前にいる彼女だけは例外のようだ。

「まあまあ、それでどうするん？」

雪の返事を軽く流しながら歩みを止めた。

ちょうど二人は向き合う状態になった。

「とりあえず……おっ、あれが雛棟（ヒナ）だよな？」

よほど気になっていたのかレビカドは雪を凝視していた。

雪が、目を逸らすと、レビカドの後方に一度は見たことがある建物が見えた。

「そうやな、あれが雛棟（ヒナ）や」

レビカドは首だけを後ろに向けた。

「そういや、部屋割とかわかるか？」

雪の目的は雛棟(ヒナ)だが、正確にはエリアの部屋だ。

「わかるよ〜」

レビカドは軽い感じで答えた。

「んじゃ、行こうか」

目的地が近づいたからか、わかったからか安心した様子の雪。

「ちょっと、さっきの答え聞いてないで」

そんなに雪に駆け寄るレビカド。

そして、不満げな表情を浮かべて仁王立ちで立ちはだかる。

が、外見上の関係で拗ねている少女の様だ。

「わかった、向こう着いたら話す」

子供に言い聞かせる様に、頭を撫でながら雪が言った。

「うちは雪ちゃんより年上やで？」

眉をひくつかせながら、レビカドが不満げに呟いた。

15部屋――01

桃色の髪を揺らし、スキップ気味に歩く少女が一人。

何か良いことがあったのだろうと、一目見ただけでわかることができるぐらいに上機嫌だった。

「へぶっ」

上機嫌なのはよかったが、スキップ気味に歩いていたせいか彼女は小さな段差につまづき、普通に転んだ。

可愛らしい外見からは、決して想像できなくもないが、あまり似つかわしくない情けない声を出して。

「痛たた」

彼女は上半身だけを起こすと、転んだ時に打ち付けたのか左足のすねを軽く摩(さす)った。

かなり痛いのだろう、クリクリとした目にうっすらと涙が滲んでいる。

「……あれ？」

少し、ほんの少しの間そうしていた彼女だったが、何かを見つけたのかを不思議そうに呟き、首を傾げる。

その顔にはもう痛みの色はなかった。

何処か一点を眺めている。

その視線の先にあるのは、生徒寮である雛棟(ヒナ)のとある部屋の窓の明かりだ。

そして、その部屋は彼女の部屋だ。

無人であるハズの部屋に明かりが灯っている。

もともと自分の部屋に帰る予定だった彼女は、少し早足気味に雛(ヒ)棟(ナ)へと向かう。

その間もチラチラと明かりの方を伺っていた。

そして彼女は、そんなに時間も掛からずに部屋の前まで着いた。

「誰か……いる？」

予想通り部屋の中には誰かが居るらしく、ドアノブに手をかけた状態で自信なさげに呟いた。

「見て見て、これすごいなー。百やで～」

「いや、それ見つかったらヤバいんじゃねぇか？」

彼女の呟いた言葉への返答は無く、部屋の中にいる人物達は何やら話し合っている様子。

声からして、女と男の二人組の様だ。
扉越しのエリアには会話の内容までは解らない。解るのは、女の方がはしゃぎまくっているということだけだ。
「あれ？」
そして、彼女はその声に聞き覚えがあった。
ドアノブを回すと、ガチャリと音をたて扉が開いた。
それに気付いた部屋の中の二人が扉の方へと顔をやる。
「エリアちゃんお帰り」
呑気に出迎えたのはレビカドだった。
子供の様な無邪気な笑顔で。
「お帰り」
その横には、疲れきった様子の雪がいた。
「私の部屋で何してるんですか？」
エリアは、二人の顔を交互に見た後首を傾げた。
「いや、なんもしてないよ」
レビカドが両手を後ろに回した。エリアからは見えないが、手に

紙の束を持っているようだ。

「今何か隠しましたよね？」

エリアはその行動を不審に思ったが、「いや、なんもないって」とレビカドが言い張るのでそれ以上は追及しなかった。

「エリアのテスト用紙を漁ってたぞー」

が、レビカドの横にいた雪が白々しく、そんな台詞を呟いた。

明らかに棒読みの様に感情の篭（こも）ってなさ気な声で。

「ええっ、か、返して下さい」

エリアは慌ててレビカドに駆け寄る。

「わ、わわ、雪ちゃんの裏切り者や～」

レビカドが叫ぶ。

台所によく出現する黒い生き物の様に逃げまくる。が、端に追いやられて体格差でエリアに押さえられた。

「自業自得だろ」

雪が悪びれもなくそう呟く。

すると、テスト用紙を取り返したエリアが顔だけを雪の方へと向けた。

「なんで止めなかったんですか？」

両頬を膨らまし、顔を桃の様に紅くしている。

どうやら、恥ずかしがりながら怒っている様子。

「いや、一応止めようと……」

「いや、してなかったで。むしろ雪ちゃんが主犯格や～」

雪の声を遮ったのは、今だにエリアに押さえられているレビカド。

右手の人差し指で、ピシッと効果音がつきそうな勢いで雪をロックオン。

「雪さん？」

疑わしげに呟く。

心なしか、雪には、声が少しだけ震えている気がした。

「い、いや、俺は何もしてないぞ」

雪は少しだけ後ろずさりながらも無実を主張した。

というより、本当は無実なのだが。

「怪しいです。というか怪しいです」

「なんで二回言うんだ？」

そんな二人を見ながら、ニヤニヤする少女……の様な容姿の女性が一人。言うまでもなくレビカドだ。

結局、頬を膨らましていたエリアを説得し、誤解を解くのに、雪は三十分もの時間を要した。

途中、レビカドなる人物の妨害があったが、綺麗サッパリと容疑は晴れた。

「しんど……」

雪はため息を深くついた。

誤解は解けたとはいえ、精神的に疲れた様子。

「そういえば、雪ちゃんから話あるらしいで」

呆れた雪をよそに、笑顔を浮かべたまま、思い出した様にレビカドが呟いた。

「話……ですか？」

エリアは言いながらベットに腰かけ、雪の方へと顔を向けた。

「さあさあ、雪ちゃん。はよう話してや」

雪の横にいるレビカドは、お預けをくらっていたため気になっていた様だ。

「エリア」

「はいっ」

雪に呼ばれ少し緊張気味のエリアは、背筋をピンと伸ばし綺麗な返事を返した。

今までの会話と違った雰囲気にエリアは戸惑った。

「いや、そんなにかしこまるなって」

困った様な表情で、大きくため息をつく。

雪からすれば、エリアにそんな態度をとられると話しにくいのだ。

雪がエリアに求めているのは、軽く流してくれるという対応だった。

「それで何ですか？」

しかし、エリアにそんな思いも届くハズもなく、むしろエリアは話の内容が気になって仕方がない様だ。

雪は、そんなエリアを見て諦めた様に口を開く。

「今日から此処に……んと、【騎士盾（アイギス）】だったか？　世話になることになった。そんだけ」

雪はできる限り簡潔に、簡単に、そう口にした。

「うわぁーい、やったでぇ～」

場の空気を読まず、雪に飛びつく子供がいた。

レビカドだ。とは言え、中身は大人の女性……のハズだが。

単純に雪が此処に残ることが嬉しいのか、それとも、異世界の住人という興味深い研究対象が近くにいるのが嬉しいのか。

雪は抱き着いてくるレビカドに対して、抵抗という抵抗をせずにエリアの返事を待っていた。

「……ほ、本物ですか？」

「俺は偽物じゃないぞ」

「あっ、間違えました。本当ですか」

「本当だよ」

雪は呆れた様に呟くと、今だに自分のお腹のあたり抱き着いていたレビカドを引き離した。

「照れてるん？」

「すごい解釈の仕方だな」

あどけて見せるレビカドは、どう見ても子供だった。

「本当ですか！　それで雪さん、どうして私の所に？」

嬉しいのか、機嫌よさ気にエリアが言った。

「ああ、それはな」

そこで区切り、ため息。

「アヌラスが雛棟（ヒナ）で寝泊まりしろってさ。んで、エリアに空いてる部屋があるか聞けだとよ」

「空いてる部屋ですか……」

う～んと頭抱えるエリア。

そんな様子を見れば答えは明白だった。

「ないんだな？」

雪が確認するに問い掛ける。

「ありますよ」

「あるのかよ！」

しかし、エリアの口から出たのは、雪の予想とは違う答えだった。

１６職権乱用――？

「ここです」

雪がエリアに案内された場所は、言うまでもなく空き部屋だった。エリアの部屋から二つ分離れているそこは、いつでも使えるように整備されている。ただ、軽く埃は積もっていた。

「いい部屋だな」

雪は部屋を見渡した。奥にはベッド、その横には本棚、中央にはテーブルがあり少し寂しい雰囲気だった。

置いてある家具は違うが、内装は同じ寮なのでエリアの部屋と変わらない。が、雪には十分だったようだ。

「これで明日から学校に通えますね」

そう言って、エリアはベッドに腰掛けた。やけに嬉しそうだった。それに対して、品定めをするように部屋の隅々を見渡していた雪は動きを止めて、顔だけをエリアの方へと向けた。

「いや、俺は学校行く気ないぞ」

そして、エリアから本棚へと顔を戻した。

キョトンと、首を傾げる。エリアは少しの間そうしていたが、雪の背中に問い掛ける。

「……どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だ」

雪の言葉にエリアはさらに深く首を傾げた。眉間にシワをよせているその顔は、疑問でいっぱいだった。

「雪さんは【騎士盾（アイギス）】でお世話になるん……ですよね？」

「そうだな」

エリアの質問に答えながら、雪は本棚から数冊の本を手に取った。顔をしかめながら本の表紙を睨んでいる。

「でも、【騎士盾（アイギス）】には通わないん……ですよね？」

相変わらず疑問でいっぱいの顔でエリアが言った。雪は手元の本からエリアに顔を向ける。

「そうだけど。どうかしたか？」

雪はサラリとそう言うと、怪訝そうな顔をした。エリアは少しの間時間が止まったかのように動かなくなった。

「エリア？」

そんなエリアを雪は不審に思い声をかけた。ワナワナと肩が震えている。

「ええっ！　なんで通わないんですか！」

「うおっ！　落ち着けって」

突然エリアは雪に迫り寄った。あまりに急だったので雪は思わず跳び上がった。

「落ち着いています！　それで、なんで通わないんですか！」

言葉とは逆に言動は荒く、エリアは雪に体を突き出すように迫る。そんなエリアに、壁を背にする雪の顔には少しだけ恐怖の色が混じっていた。

「言うから、マジで落ち着けって……なんか怖いぞ」

最後の辺りは小声だったが、雪の必死の懇願のおかげかエリアはとりあえず落ち着いた。とはいえ、不満げな表情で、肩で息をしているので安心はできない。

「で、なんでなんですか？」

さっきからそればかりだな？

なんて、雪は思ったが、もちろん口にはださない。諦めたようにため息をついた。そして、エリアから視線を外した。

「なんつーか、俺は元の世界に帰るためにやることがいろいろあるし、そんな時間ないからな」

雪はバツが悪そうにそう言った。

雪はまだこの異世界のことについて知らないことが多く、知るべ

きことがたくさんある。召喚について調べ、元の世界へ帰る。それが雪の目的なのだ。そしてそれはには時間に制限があるのかはわからないが、早いにこしたことはない。
なのでお世話になるのはありがたいが学校には通わない。というのが雪の考えだった。

「そうなんですか。……ちょっと残念です」

顔を少し俯かせてあからさまに落ち込んでいる様子のエリア。

「なんでエリアが落ち込むんだよ」

ため息混じりに雪は呟く。

「いえ、せっかく友達が増えたのに……」

エリアはそう言って仰向けにベッドに倒れ込んだ。そして、残念です、と付け足した。

「……ま、別に学校通わなくても会えるだろ。当分はこの部屋にいる訳だしな」

この異世界での常識を身につけ、召喚についてある程度わかるまで、雪はこの部屋で暮らす気だ。それに、此処は学校なので資料もそれなりある。雪にとっては何もかもが好都合だった。
しかし、そんなに順調に物事が運ぶ訳がなく。

「失礼するで」

部屋の扉を勢いよく開けて、レビカドが登場した。いきなり、し

かも返事を聞かずに堂々と。

「失礼するなら帰れよ」

そんなレビカドに、雪は特に驚きも動揺もせずにそう言った。

「ひどいわぁ、雪ちゃんはひどいわぁ。ところで、何してんの？二人で」

両手で両目を隠し、わざとらしいぐらい嘘っぽい嘘泣き。そして、レビカドは急に態度を変えてベッドの上で座っているになっているエリアの方へと目をやった。

「何をって。これからのことを話し合ってました。ねぇ、雪さん」

キョトンとした表情の後、エリアはそう言って雪に同意を求めた。

それに対し雪は「ああ、そうだな」とめんどくさそうに答えた。

「なるほど、なるほど」

一人で頷き出すレビカド。雪とエリアが怪訝な表情を浮かべた。

「何がなるほどなんですか？」

よほど気になったのか、それとも気まぐれか、エリアはレビカドに歩み寄った。

「いやぁ、二人の仲がこない進んでるなんて……。ちなみに式はい

つなんかいなぁ」

わかって言っているのだろう。レビカド意地悪な笑みを浮かべた。

その言葉に顔を赤くするエリア。

「ちちちが、血がっ？」

顔をりんごのように真っ赤にし、必死に否定の言葉を口にするが、うまく喋れていない。

一方、雪はエリアのように顔を真っ赤にすることはなかったが、あからさまに動揺していた。

「どこをどう聞いたらそうなんだよ」

「痛ぁ」

まるで漫才のようにレビカドの頭を軽く叩く。レビカドは叩かれたところを両手で押さえて涙目で雪を睨んだ。

しかし、雪は口を尖らせて「なんだよ」と不機嫌そうに呟くだけだった。

「つっーか、なんでレビカドがいんだよ」

雪は不機嫌そうにレビカドに睨んだ。

「いやぁ～、盗みぎ……さっきの話聞いてしまってなぁ～」

「ええええっ！？」

ベッドに座っているエリアはそう言ってあたふたしだした。
そんなエリアを余所に、雪はレビカドに歩み寄る。そして、レビカドの頭に乗っている帽子ごと鷲掴みにした。こめかみの辺りがひくついている。
「盗み聞きねぇ～。覚悟はできてるんだろうな」

あれから数十分。
雪に怒られたレビカドは、ベッドに寝転がっていた。
「うう～、女の子にチョップはないわぁ」
そう言って頭を両手で抑えるレビカド。帽子は机の上に置いてある。
「痛そうですね」
その横で、エリアが苦笑していた。
「んで、何の用なんだよ」

未だに不機嫌そうな雪。両腕を胸の前で組み、レビカドを上から見下ろしていた。

「ええとな」

そう言って、レビカドはムクリと上半身を起こし、両腕を後ろに伸ばし支えにする。そして、顔を雪に向けた。

「雪ちゃんが学校通わんって聞いてそれを阻止しにきたんよ」

そう言ってレビカドはベッドから降りると雪に近づく。

「へー」

雪は適当に視線を横へとやる。

「やる気なさそうな返事ですね」

呆れ顔のエリアがそう呟くと、レビカドは雪に顔を向けた。

「というかなぁ、雪ちゃんは学校通わないといかんのよな」

してやったり、と笑みを浮かべるレビカド。その手には一枚の紙が握られていた。

「どういうことだ？」

雪は首を傾げ、視線を下に落とす。そこには手を差し出してニヤニヤするレビカドがいた。

雪はため息をつきながらレビカドから一枚の紙を受け取った。

「なんて書いてあるんですか？」

ベッドに腰掛けていたエリアが雪に問い掛ける。しかし、雪は読むのに夢中で気付いていない。

「これ本当か？」

「そうやで」

雪の質問にえへん、と胸を張るレビカド。

「……気になるんですけど」

いつの間にか、エリアは雪の隣にきていた。

雪はだるそうに紙をエリアに向ける。

エリアは目だけを動かす。

「よかったですね」

一通り読み終えたのか、エリア顔を上げた。そして、嬉しそうに雪に微笑んだ。

「よくねぇよ。確かに世話になるっつたけど、まさか交換条件があったなんてな。なんで異世界に来てまで学校に通わないといけないんだ？」

雪はため息をついた。

「雪さんの世界にも学校があるんですか？」

何を期待しているのか、エリアが目を輝かせた。そして、雪に迫り寄る。

「あるけど、勉強ばっかりで楽しくないぞ」

「勉強嫌いなんですね……」

エリアが軽く笑う。雪は不機嫌そうだ。

「それはとりあえず置いといてや」

レビカドがそう呟くと、二人はそちらに顔を向けた。

「悪い条件じゃないと思うでぇ」

雪がアヌラスと交渉して生活を補助してもらうことになったが、その条件として、この学校――【騎士盾（アイギス）】の生徒になることだった。

「衣食住。全部あるし」

異世界であるここに迷い込んだ雪にとって、衣食住が保証されるのはとても魅力的だった。しかし、雪は納得のいかないような顔をした。

「いや、それはいいんだけどな。ここってさ士官学校だろ？」

士官学校の生徒になるということは、兵隊の見習いになるということだ。もちろん、雪は兵隊になりたい訳ではない。

衣食住が保証されても、それでは異世界に帰る方法を調べたりする時間がなかったり、日本という平和な国で育った雪には不安だった。

「まんま士官学校や。ちなみに、断ったら不審者ってことで牢獄行きやで」

レビカドはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる。最悪だ、と雪は呟き頭を抱える。

「ご愁傷様です」

エリアは苦笑した。

そもそもの原因はエリアにあるのだが、どうやら忘れているようだ。

「明日から頑張ってな～」

レビカドが出ていき、部屋は静まり返る。

「なあ」

雪が片手で頭を支えながら口を開いた。エリアは軽く首を傾げた。

「なんですか？」

「帰っていい？」

「え、えと……何処に？」

困ったようにエリアは
呟いた。

１６職権乱用――？（後書き）

17休日――01

朝がきて空が明るくなってきた。雪の住んでいた日本と変わらない空だった。

部屋の窓から雪はそんな空を見上げていた。今日は雪にとっては“初登校日”だった。“初”なのは此処が異世界だからだ。

「めんどくせーな」

雪がそう呟くの同時に部屋の扉が開いた。そこから現れたのは桃色の髪をした少女だった。

「雪さん、起きてます……か？」

入って来るなりエリアは首を傾げる。が、次の瞬間には雪を見つけた。

「起きてるよ」

「よ、予想外です」

エリアは雪が起きているということに動揺していた。そんなエリアに雪はため息を一つ。

「悪かったな、早起きで」

雪はだるそうに歩く、その隣でエリアは楽しそうに歩く。今日から雪は【騎士盾(アイギス)】に通うのだ。

大理石で出来た、白い廊下。壁にも大理石が使われていて、所々には石像が彫られている。それはまるで彫刻のようで、芸術品のようだ。ただ、雪とエリアは全くそれには目をやらない。エリアは普段から目にしているからともかく、雪は全く興味が無いようだった。

「人が一人もいないのは俺の気のせいか？」

ふと、足を止めて雪がエリアを見た。その目には何やら怒りの色が見える。

雪の言う通り、寮出てから此処に来るまで誰ともすれ違わなかった。普通に考えてありえない。なぜなら此処は学校だ、それも敷地もそれなりに――日本の学校とは比べものにならないほど――ある。

しかし、誰にも出会わなかった。二人が朝早くから登校していた……というのも要因の一だったが、それ意外にちゃんとした理由があった。

「え、えっ～と」

エリアは目を泳がせながる。誰がどう見ても挙動不審なほどに。

「今日は休日でした」

諦めたのか開き直ったのか、さらりとそんなことを口にした。苦笑しながら。

朝早くから登校していただけではなく、だからではなく、休日だからだった。この学校――【騎士盾（アイギス）】――にも休日はある、今日がその日だったのだ。

エリアはそのことをちゃんと知ってはいたハズだった。

「やっぱな」

呆れたように、雪はため息をついた。そして、軽くエリアを睨みつけた。

「すいません。ちょっと緊張していて……」

エリアは軽く頭を下げた。雪を“転校生”として迎えようと張り切っていただけに、エリアは軽く自分を責めた。

「何に緊張していたのかしんないけどな」

雪の不満が飛んでくると思っていたエリアは、瞬きをして頭をゆっくりと上げる。

「そうやって謝れるとなんか気まずい。俺はただの居候みたいなもんだし、てか、別に何とも思ってないからさ」

エリアが頭を上げた先には、出会った時と同じようにだるそうな表情の雪がいた。雪は後ろ頭を掻きながら、目線を適当に逸らした。

「せっかくだから案内頼んでいいか」

少しの沈黙。しかし、すぐに破られる。

「はい。任せて下さい！」

エリアの元気いっぱいの声に。驚いた雪は思わず後ろに下がったが、エリアを見て安堵のため息をついた。

「通う癖に、教室とかも知らねーからな」

雪の言葉に、エリアは小さく微笑んだ。

「それじゃあ」

高らかに、いざ案内を始めようとした時だった。

「誰そいつ？」

そんな時、不意に聞こえてきた声。二人ともが声の方に顔を向けた。

紫色の瞳、褐色の肌、瞳と同じ色の髪。腰に巻いているベットに

数本のナイフをぶら下げている少女が一人。廊下の奥から雪を見詰めていた。

「あんたこそ誰なんだ」

雪は相変わらず呆れたように、めんどくさそうに、そう言った。

雪の言葉に少女はニヤリと笑った。

「私はリネ。リネ・クライよ。言われた通り名乗ったんだし、ちゃんと答えてよ？」

その自己紹介はまるでからかうように挑発的だった。ニヤニヤと、ニコニコと、悪戯っ子の様に笑みを浮かべている。

「いや、めんどくさい」

「ええっ！」

「ちょっと！」

雪の言葉に、エリアとリネは困惑の声を上げた。そんな二人を見て、ニヤリと笑うと口を開いて「冗談。植木雪な。リネよろしく」と。

「騙された～。ちぇっ」

両手を頭の後ろで組ながらわざとらしく、悔しそうな台詞を吐いた。

「悔しがってないよね？」

「さっすがエリア。あたしのことよくわかってる～」

「ちょ、ちょっと」

恐る恐る確認に言ったエリアに、リネは抱き着いた。エリアは少しだけ苦しそうだった。

「そろそろ苦しいかなぁ？」

「最初から苦しいよ」

途端にエリアを離す。リネは笑顔を浮かべたまま、エリアの頬っぺたを両方摘んだ。

「で、誰なのこいつ？」

「ほぃつひゃないれふひょ」

頬っぺたを摘まれながらも何かを訴えようと、必死なエリア。何を言っているか、リネと雪はわかっていない、というか、わからない。リネに至ってはわかろうとしていない。

「何言ってんの？」

リネは両手を離した。エリアの頬っぺたは赤かくなって……おらず、別に強く摘まれた訳ではなかった。リネが手加減していたからだ。

それでも、多少痛かったのか、瞳が少し潤んでいた。

「やり過ぎちゃった？　ごめんごめん」

「全く……、リネったらすぐに」

「だから悪かったって。いじけないでよ～」

文句を言い出したエリアに、リネは慌てて駆け寄る。文句を言う割にはなぜだか表情の緩いエリア。慌ている割にはなぜだか明るい表情のリネ。そして、二人とも笑顔になった。

「で、結局誰なんだお前は？」

二人が笑顔で話しだしたことで、何やらわからない疎外感を味わい、雪は不機嫌そうだった。

18休日――02

廊下を歩く三人。雪とエリアとリネは、仲良く並んでいた。

「つまり、エリアとリネは親友なんだな？」

右端を歩く雪が二人に顔を向けた。

「はい。大親友です」

真ん中のエリアは雪に微笑み返した。その後ろにいるリネも表情を緩くしていた。

リネとエリアが親友だということに、雪は内心驚いた。真面目なエリアに、ふざけた雰囲気のリネ。

なにやら変なコンビだと、雪は思った。

「それで……あんた、雪“くん”は何者なの～」

「“くん”づけはやめてくれ」

雪は呆れたように片手を額に当てた。そして、ため息。リネはそんな雪を軽く笑うと

「いや～、ごめんごめん」

軽く両手を合わした。

「雪さんは明日から私達と同じ【騎士盾（アイギス）】に通うんです」

雪が口を開こうとした時、エリアがひょこっと出てきた。少し嬉しげに、自慢げな表情をしている。

「それじゃあ、お仲間って訳か～」

「まあ、そうなるな」

両手を後ろに回し、腰の辺りで組んだリネの呟きに雪はため息混じりに返した。

リネはそれ以上雪のことを質問したりはしなかった。

具体的には「何処から来たの？」だとか「何で転校して来たの？」のような問い。雪の召喚されたという事情をリネは知らない。というより、雪とエリア、アシラと他数名の教員以外は知らないのだ。

つまり、彼女――リネ・クライはそんなことを一切気にしない人物なのだった。

そのうえ「私は兵級【ランク】は従騎士【エクスワイア】だよ～」と、雪が興味を示さなくても勝手に自己紹介を始めた。

そんな彼女を、雪は“明るい性格”だと素直に思った。

エリアが今の二人の状況を説明すると、リネも“案内”に同行することになった。というよりは、リネが一緒に行きたいと、ダダをこねたのだった。

【騎士盾（アイギス）】は学校だ。

だが、日本の学校とは違い部活動などというものはない。士官学校だから、なにより異世界なのだから。特別変わったことではないかもしれないが。

なので、基本的に休日は人の出入りが少なく、普段とは違った印象を受ける。が、雪はまだ通ってすらいないので、わからなかった。

「ここが“闘技場”です」

雪達三人の目前には、ローマのコロッセオのような、建築物。全体が石でできていて、真ん中に平らな円（サークル）がある。

そして、それを囲むように観客席が広がっている。

人の気配がないことも要因の一つだが、真近くで見たその巨大さに、雪は小さい感動を覚えた。

とはいえ、それは表（おもて）には表れず、雪はいつも通りのだるそうな表情を浮かべていた。

「たまに此処で模擬戦やったりするんだよね～」

リネの説明をするような呟き。

「そういえば、もう少しでトーナメントがありますね」

今思い出したのか、エリアが口を開いた。その言葉に雪は怪訝な表情をした。

「なんだ、そのトーナメントって……」

嫌なものに関わっているかのように、雪が問い掛けた。

「トーナメントというのはですね……」

雪の質問に得意げに喋り始めたエリアだったが「ようするに、誰が一番か戦って決めよう～って、全員参加の模擬試験だよ～」

残念ながら、リネに言われてしまった。

自分の今の実力を自覚するため。
向上心を磨くため。
などという理由が挙げられているが、実際トーナメントは順位を決めるためにあるような模擬戦で、順位を決める模擬試験だ。
ちなみに、リネは全員参加と言っているが実際は、治療魔導師【ヒーラー】など、一部の生徒は参加しない。

「それって俺も参加すんのか？」

雪はあからさまに、嫌そうな表情をした。

「はい。アヌラス先生も言っていたので、絶対です」

満悦の笑み……とまではいかないが、エリアは笑顔だった。

「……んで、トーナメントっつうのは、いつあるんだ？」

「それは、あ」

「明日だ」

リネの声は、別の声によって遮られた。
その声は、雪のものでも、エリアのものでもなかった。闘技場の奥から聞こえてきた。
思わず三人は顔を向けた。

「レノフじゃん」

リネの目の前にいたのは一人の男性だった。彼――レノフは、長い髪を後ろで縛っていてそれが帯のように風になびいた。服装は雪

（袴）と似ていて、上半身は胸元を軽く開けた服、腰に大きな布を巻いてる。下半身は、膝下まで黒いズボンを穿いていた。
黒い前髪は左右に分けられていて、肩の辺りまで垂れ下がっている。瞳も髪に負けず、黒い。

「相変わらずお前は口が悪いのぉ……」

レノフは少しだけなまったような喋り方で、リネに返した。

「そうかなぁ～」

リネは頬っぺたに人差し指を当ててあどけて見せた。そんなリネを見て、レノフは呆れたように一息。

「ちょっと聞いていいか？」

「はい、何でしょう？」

リネとレノフを見ながら、雪はエリアに声を掛けた。

「レノフ……ってのは、どんな奴なんだ？」

言いながら、雪はエリアの方へと顔を向けた。

19雪の後悔―壱

「ええと……いい人です？」

「なんで疑問形なんだ？」

首を傾げたエリアに、雪も首を傾けた。お互い向き合い、同じ方向へと首を傾げているという、“鏡”状態になっていた。

う～ん、と唸っていたエリアだったが、自信なさ気に口を開く。

「私達の班長？」

「いや、知らねぇけど……」

雪はレノフと会うのはこれで三度目……にはならず、初対面だ。なので知っている訳がなかった。

班長というのは、学校でいう“クラス議長”で、小隊でいう“隊長”のような役割をもつ。簡単にいうと、エリアの学級をまとめる人物、という意味だ。

「お前が雪か？」

声のした方向へと雪が顔を向けると、そこにはレノフがいた。

雪とエリアの方へと歩んで来たらしく、彼の――レノフ――背後には、伸びをしているリネもいた。二人のやり取りは終わったらしい。

「はい雪さんです」

「……なんでエリアが俺の代わりに答えんだ」

レノフの質問に答えたのは雪ではなくエリアだった。そんなエリアに、横にいた雪が不満を呟いた。レノフは、少しだけ微笑むと、口を開いた。

「自己紹介が遅れたなぁ。俺はレノフ。レノフ・マナジー。よろしく頼む」

いきなり左手を雪に差し出す。雪はそれを見詰めながら、自分の左手を軽く叩きつけた。

「植木雪な。よろしく」

握手をしようと手を出していたレノフは、雪の行動に目をぱちくりとさせ、自分の左手に視線を落とした。

「お互い自己紹介終わったし、闘技場に入ろっか～」

リネはエリアに駆け寄り、手を繋ぐと引っ張るように歩きだした。

「ちょ、リネ？　引っ張らないでよ」

いつもらしからぬ口調で、エリアはさらわれるように引っ張られる。

「おいおい」

雪は、呆れるように呟くと、めんどくさそうな顔をして二人の後

を着いていく。
レノフも雪に続いた。
「なぁ、そういや、あんたはここで何してたんだ？　今日は休日なんだろ？」
「ああ、少し訓練をしていた。ここは常に解放されているからなぁ」
「自主的に……って訳ね」
レノフの言う通り、闘技場は、休日でも平日でも、さらには授業中でも利用することができる。もちろん、授業中に利用するということは必然的に授業を無断欠席することになり（一部の授業――日本でいう体育――では普通に授業中使用するため心配ない）、罰を受けるハメになるが……
つまり、レノフは休日である今日、自主的にここを訪れていたのだ。
「ここと実戦場ぐらいしか場所がないからなぁ」
実戦場とは、日本の学校に当て嵌めるとすれば、運動場だ。平日は闘技場と同じように利用することが可能だが、休日には使用を禁じられていた。
「雪も少しせぬか」
石で作られている柱が森のようにたくさんある通路を二人――雪とレノフ――が歩いていた。
その言葉を聞いた雪は、あからさまに嫌そうな顔をしたが、レノフは雪の後ろを着いて来ていたので、その表情を見ることができな

かった。

「いや、俺は遠慮しとく。武器もねぇし」

いまさらだが、今日の雪は丸腰で制服姿だった。

制服といえば学ランだ。しかし、学ランは上から下まで真っ黒なのだが、やはり異世界。

制服黒色を基調としているだけで、袖(そで)の部分は白いラインが二本、腕輪のように入っている。ズボンにも、脛の辺りにも白いラインが二本、袖同様にあった。また、左胸や両肩には、金属が付けられていて銀色に輝いている。

「武器を持っておらぬのか？」

不思議そうにレノフが雪の背中を睨む。

雪が武器を持っていないのは、学校で支給されるからと昨日の夜、エリアに聞いたからだった。が、それを断る理由に使用したのは、レノフの言う、“自主的な訓練”に参加するのがめんどくさいからだった。しかし、そんな理由で断ったことを後悔することになることを彼は知らない。

「思ったよりでかいのな」

先ほどの石柱の通路を抜けると、真ん中の円形の舞台(ステージ)に着いた。

そこは、周りが大きな壁で囲まれていて、その先には観客席が広がっている。壁には、東西南北の四方向に門がある。雪達は南にある門から出てきた。

「雪、これなら使えるだろう」

雪が初めて見る闘技場の風景に感動していると、背後から――雪が先ほど出てきた門の内側から――レノフが現れた。
その手には……剣のような何かが握られていた。
いや、剣だった。雪のいた世界でいう、西洋の両刃剣だ。
刃渡りは一メートル程度の得物だった。
「ここには、武器がたくさん置いてある。心配はいらぬ」
レノフの背後――門の内側にある控室――には壁にいくつも武器が立てられている。
雪がまるで石像のように、固まり黙り込んだのでレノフが続けて口を開いた。
「少し手合わせをしようではないか」
「いや……」
レノフのその言葉に、やっと動いた雪。断ろうとしたが、後ろからレノフとはまた違う声が二つ聞こえてくる。
「雪さ～ん。頑張って下さい」
一つはエリアの声。
観客席から身を乗り出し、両手をメガホンのように口元に当てている。
「さあ、二人とも頑張って～。楽しみだなぁ～」

二つ目はリネだ。
エリアと同じく、観客席にいた。エリアのすぐ隣から手を振っていた。
雪は引き攣ったように笑いながら、手渡された剣に視線を落とした。

20王の慈悲

「なんでこうなるんだ？」

レノフから渡された剣を手に、雪は額を押さえた。

その顔には、苦労の二文字が浮かんでいた。

「どうかいたしたか？」

対して、雪と試合する気満々なレノフは、雪を心配するように声をかけた。

「ちょっと頭痛がな」

そう言うと、雪は深呼吸をした。そして、改めてレノフと向き合った。

そんな二人を観客席からは別の二人が見ていた。

「相変わらずやる気がなさそうですね……」

苦笑するエリアの視線の先には雪がいた。

「早く始まんないかなぁ～」

エリアの横にいたリネは、手摺りに持たれ掛かると、暇そうに空を見上げた。雲一つない青空――快晴――だった。

「ねぇ」

上を向いたまま、リネが呟く。
その目は何処か遠くを見ている。エリアはそんな気がした。
「雪とレノフ。どっちが勝つと思う？」
エリアが、何、と聞こうとする前にリネは続けた。言い終わると、エリアの方に顔を向け、微笑んだ。
そんなリネを見て、エリアはニ、三度瞬(まばた)きをした。そして、口を開いた。
「もちろん――」

一方、雪とレノフはまだ試合を始めていなかった。お互い、剣を構えていなければ、睨み合いもない。二人並んで仲良く話をしているような……そんな雰囲気。
「するなら、さっさと始めないか？」
雪のその言葉からは、早く終わらせたい、というやる気のなさが滲み出ていた。
だが、レノフは気にせずに続ける。
「そう急ぐでない。雪は“これ”を使うのは始めてであろう？」
そう言って、レノフは手に持っている剣を雪に見せた。
「初めて……だけど、剣だろ？」

雪が“剣”を使うのは初めてだ。だが、竹刀や日本刀を手に取ったことがある。似て非なる物だが、使用用途は同じ。特に問題はないはずだ。

「剣は剣だが……よく見よ。少し変ではないか？」

レノフの言葉に、雪は手元に目をやる。
柄は白く、刃（やいば）は銀色。雪には、見た感じ普通の剣に見えた。

「どこが変なんだ？」

諦めたのか、雪はレノフに答を求めた。
すると、レノフは雪を睨みつけた。

次の瞬間。雪の体に激痛が走った。

左肩から腰の右側までに一直線に走る痛み。

雪は膝をつき、声にならない、くぐもった声。
呼吸が乱れ、やけに大きく聞こえる命の鼓動。

それは一瞬だった。

本能的に、雪は“斬られた”と思ったが、痛む箇所に触れても傷口という傷口は見つからない。痛みも次第に引いていく、さらに出血すらしておらず、服にも肌にも外傷はなく、言葉通り“無傷”だった。

「なんだ今の……」

雪がそう呟く。状況が分からず、困惑しているのだろう。顔からめんどくさげな表情が消えていた。

「この剣では斬れぬ」

後ろから聞こえてきた声に雪が振り返ると、レノフが静かに佇んでいた。その手には、雪の剣と同じ物が握られていた。

「身を持って体験したのだ。理解いたしただろう？」

「……なるほどね」

雪はそう言うと、剣を握る手に力を込める。

雪が先ほど体験した事態は、レノフの不意打ちによるものだった。確かにレノフに斬られたのだ。が、雪には傷が一つもなかった。

そして、雪は無敵でもなければ不死身でもない。つまり……

「つまり、この剣じゃあ傷は与えられない（・・・・・・・・）ってことか」

謎が解けたかのように、雪が口を開いた。

「その通りよ。この剣――クルタナは斬ることはおろか、殺すこともできぬ不殺の刃。……まあ、痛みはあるのだがな」

レノフと雪が持っている剣――クルタナは、この世界では実戦を摸した戦闘や、剣術の授業など様々なところで使用されている。

それは、この剣には、相手を“殺せない”という性質があるから

だ。斬られた相手は痛みさえ感じるものの、負傷することはない。また、痛感によるショック死にならない程度しか痛みはない。
実際は、目や鳩尾(みぞおち)など――人体の弱点――を狙われるとわからないが、基本的には致命傷が与えられない剣なのだ。
そんな性質上『王の慈悲』という名でも呼ばれたりもしている。

「便利な武器なのな」

「これで実戦と変わらぬ戦いを楽しめよう」

実戦では生きるか死ぬかの瀬戸際で、相手のことを考える暇はないが、模擬戦であればそうはいかない。
相手に大きな怪我を負わさないようにと、多少手加減をしてしまったり、全力を出せなかったりする。だが、クルタナによりその心配はなくなった。
レノフが、雪を斬った時のように、躊躇(ちゅうちょ)せず、躊躇(ためら)いもせず、実戦に近い形で打ち合えるのだ。

「だな。んじゃ早く始めよう」

雪言葉で二人の間に沈黙が訪れる。　二人とも剣を構えた状態で睨み合っている。
雪はクルタナを両手で持ち、雪から見た剣先がレノフの顔の位置にくるように剣道の構えをしている。
レノフは左手にクルタナを持ち、突き出すように雪に向けていた。

数分間の沈黙を破ったのは雪だった。

21絶対零度―1

雪は左足から大きく踏み込むと、剣をレノフの体目掛けて振り下ろした。しかし、レノフはそれを難無く後ろに下がり避わすと、距離を取り、再び構えた。その剣先は雪に、真っ直ぐに向かっている。

今度はレノフから雪に向かって駆けると、剣を横に振るう。その目にも止まらぬ斬撃を受け止めて、雪はそこから踏み込み一閃するような一撃。

しかし、それすらもレノフに簡単にあしらわれてしまう。

「さすが……。隙見せてくれないのな」

二人の間に距離が出来ると雪がレノフにそう言った。三メートル程離れて向かい合っている状態。

雪の向かいにいるレノフは静かに笑う。そして、一気に距離を詰めた。まるで発射された弾丸の如く、雪に迫るとそのまま一撃を振り下ろす。雪がそれを受け止めると、まるで翻弄するかのようにそのまま、右から、左から、下から、と狙いを付けず無造作に、それでいて受けざるを得ないような攻撃を連続に繰り出す。

そうなると、雪は防御に手一杯になり文字通り防戦一方な戦いを強いられる。そして、段々と攻撃に対する守りが遅れてくる。誰がどう見ても、明らかに雪は押されっぱなしの状況だ。

そして、反応が遅れた雪の顔に、触るように剣先が当たった。雪は舌打ちをすると、崩れた体勢から無理矢理腕を振るい、レノフの

連続攻撃を断ち切る。
雪の思わぬ反撃に、レノフは後ろに飛び、距離をとる。
「よくぞ、受けきった」
雪が顔を上げると、レノフがうっすらと笑みを浮かべていた。
レノフが愉(たの)しそうに笑っているのを見て、雪もまた、笑っていた。
それは、互いに相手を自分と同格以上と認めた証拠だった。
「そっちこそ、凄い腕だな」
先ほど苦しそうにレノフの攻撃を受けていたのが嘘のように、雪の声は爽やかだった。
「次はそちらの番であろう？」
何かを期待するように、レノフは剣を構え直す。その視線の先では、雪が剣を片手で肩に担ぐようにしている。
先程とは違った構えだ。
しかし、それは構えと言うには隙が有り過ぎる。見る人によってはただ単に、肩の上に乗せているようにも見える。
それはレノフも同じだった。が、レノフは気を緩めず、寧ろ、気を引き締め、雪を見据える。
「んじゃ、ご期待に添えますか」
言うのと同時に、雪が動き出した。レノフに向かい足を動かす。

そして、二人の距離が縮まったところで、片手で剣を振り下ろす。レノフはそれを受け止める。

しかし、同時にレノフは鈍い衝撃を感じ、よろけて後ろに数歩下がっていた。

雪が剣を振るった方とは逆の腕――左腕――で、振り下ろすのと同時に踏み込み、殴ったのだ。レノフの右側の腹を。

レノフは数歩下がったところで表情を歪ませ、膝をついた。そんなレノフにも、雪は攻撃の手を緩めない。チャンスとばかりに回し蹴りを放つ。

レノフは左腕で雪の蹴りを受け、後ろに飛んだ。着地すると瞬時に体勢を整えたが、先ほどまでの余裕は感じられない。

「まさか体術も得とくしていようとは……」

雪が剣だけでなく、拳や脚で攻撃した。レノフにはそれが予想外だった。しかし、レノフと雪は初対面で、試合をするのも初めてだ。なので当たり前といえば当たり前だ。

「まあ、剣道してたけど、家の道場じゃあ何でもアリ、だったからな」

雪は右手に持っているクルタナを肩で、トントンとさせる。

普通に剣道をしていて、雪のような技術は身につかない。それは、雪の戦い方が剣道とは異なるからだが、それだけではない。雪は部活動で剣道をしていたが、家では剣道とも古武術とも掛け離れた独自の戦い方を編み出していた。

そしてそれは、彼の祖父――雪房との戦いを通して得られた技術であり、普通では身につかないのである。

「まだするのか？」

雪がそう呟く。

彼の中ではもう勝負は着いているのだろうか、緩い雰囲気だ。

「もちろん。まだよ」

レノフは雪にそう返すと、一度目を閉じる。そして、改めて睨みつける。

「んじゃ、行きますか」

言うより先に雪は駆け出すと、地面を蹴り、飛び上がる。そして、レノフの上から切り掛かる。

レノフはそれをしゃがみ込み避わす。そして雪が着地すると同時に、左手を開けて、雪のいる方に向け翳（かざ）す。

雪がその行動に首を傾げていると、レノフの体が蒼い光に包まれる。

「我、今此処に冷たき刃で印を刻み申す者なり」

先ほど、レノフは雪の予想外な行動に驚かされたが、それは初対面だからだ。

ということは、それと同様の理由で、雪の予想外な行動をレノフ

がとっても不思議ではない。

レノフを包んでいた光は、詠唱に合わせて文字の鎖に変化する。

雪はこの光景を一度見たことがあった。

魔術……である。

レビカドが魔術を発動した時と現象が酷似していた。ただ違うのは……この魔術はレビカドの使用した魔術と違い、攻撃魔術ということだった。

「ちょ」

雪は慌ててレノフに声を掛けた。

「白銀の刃にて嘆きを絶て……『コキュートスカット』」

しかし雪の声は、レノフの魔術、『嘆きも凍てつく刃』により掻き消された。

そして、まるで氷のように透明で、粉々に砕けたガラス片のような輝きを持つ細い風が、雪に迫る。

コォォォォ、と音を立てて、地を裂き空を割る冷気。

目には見えない刃だが、雪はそれを反射的に、奇跡的に、横に飛びやり過ごした。が、空気により伝導された冷気は防げずに一瞬、息が止まる。

まるで、吹雪のあれる山頂に放り出されたかのような冷たさに雪の体は晒された。

風が去っても雪の口からは白い息が吐き出された。

22絶対零度―2

クルタナを地面に突き刺し、雪はもたれ掛かる。まるで体が糸の切れた人形のように力無く。その肩と頭には霜が掛かっていて、白く染まっていた。

「……もう終いか？」

レノフは構えを解き、剣先を地面に落とす。

「終わりたくないけど」

頭を掻きながら、雪はぼやいた。

「なんつーか、全然違うよな」

それは、自分の世界にはない力への不満のようだった。

魔術という雪の世界にはない力。そんな魔術に対して、初めてその強大さを実感した。

意味があるのかないのか曖昧な言葉を発するだけで、風を起こし、空を裂く。さらには、熱を奪う冷気で、対象を凍えさせると。雪はその力の大きさを実感し、嫌悪した。

もちろん、レノフやこの世界の人間からすれば、それは当たり前の技術で力だ。魔術を発動させる呪文（ことば）にはちゃんとした意味があり、それを学び、魔力を魔術に変換する技術を学んで得た“力”だ。努力の結晶、或は証と言ってもいいほどの正当な代物だ。

しかし、魔力を持たない、魔力が無い世界から来た雪にとって、強すぎる力以外の何でもない。
それ以外の何でもなく、そこに至る努力や過程は雪にはどうでもよかった。
問題はあんな強大なものにどうやって対抗するか……
雪にとって今一番重要なことだった。

「……まいったな」

本当に困った。そんな雰囲気を作った、雪の呟き。レノフは黙ったまま、雪がどうするのか見極めていた。

「考えても仕方ないか。うし、続きだ」

何か策が浮かんだのか、浮かばなかったのか。雪は立ち上がると、剣を取り構える。冷気による体へのダメージはあまりないのか、呼吸も落ち着いている。

「では、始めるぞ」

剣先を雪に向けるレノフ。

雪の方も、準備が出来たと、構えて示した。
そして、先に雪が動いた。　剣を腕ごと後ろに回し、大きく振りかぶる。
それを見て、レノフはすかざず避けようと、回り込む。雪の攻撃はモーションが大きいので、回避しようとするレノフの動きには余裕が伺える。
「甘いよなぁ」

完全に振り切った、レノフは笑みを浮かべた。

――しかし、次の瞬間にレノフの腹部に鈍い痛みが訪れる。

「がはっ」

雪の左腕がレノフの腹部にめり込む。先ほどの動きはフェイクだった。雪は続けざまに左足で蹴りを放つ。

のけ反っていたレノフは、避ける間もなく足を払われた。瞬間、レノフの体が宙を舞い、叩き着けられた。

足を払われた後、雪に衿元を捕まれ、地面に落とされ――いわゆる背負い投げ――たのだった。

雪はいつの間にか丸腰だった。フェイク――剣を後ろに大きく振りかぶった――時には既に剣を手放していた。

もちろん、レノフにそんな状況は理解する間はない。苦痛の声を漏らしながら体勢を整えようと、転がり距離をとる。

「忘れていた。ただの剣士ではなかったなぁ」

「残念ながらな」

レノフは立ち上がると二、三度咳込み、雪を睨む。そして、唇を動かし詠唱を始める。

「我が願うは静寂」

すると途端、雪が詠唱を止めようと走りだす。

つまり、雪は魔術を発動させない気だ。

しかしレノフは雪に構わず続ける。その体が、蒼い光りを纏いだした。

あと少し――一メートル――で二人の距離が０になる、そんな時。

「絶対の静寂を、全てが静まる白銀の牢獄……『アブソリュートゼロ（絶対零度）』」

レノフがそう言い終わる。雪は間に合わなかったのだった。

そして急に辺りの気温が下がりだす。先ほどまでの太陽の温もりが嘘みたいに寒くなる。さらに雪は冷気による痛みを感じた。

雪は魔術に対する知識は皆無なので、今の魔術がどういったものなのか、警戒している。ただ、冷気を扱う魔術とだけ、先ほどからレノフが使う　魔術から解っていた。

いつの間にか、雪が降り、そして、雪の回りの地面一帯が氷の牢獄の如く凍っていた。雪に逃げ場は無く、体からはドンドン熱が奪われていく。

雪の足が感覚を失う。雪が視線を下にやると、凍っていた。

もはや雪に為す術はなかった。

「……まいった」

雪はお手上げだ、と両手を挙げた。つまり降参の合図だ。

すると、冷気が少しずつ薄れていく。レノフが魔術を解いたのだ。

「寒そうよなぁ」

レノフは魔術を解いたが、既に凍ってしまった地面や雪の足はすぐには溶けない。呑気におどけた。

雪はレノフを睨んだが、両腕で体を抱え摩りながらなので迫力はない。

「寒いに決まってんだろ」

文字通り震えながら呟く。しかも、足――正確には靴の表面――が凍っていて動けない。

なんとも情けない状態だと、雪は自分のことを他人事のように思っていた。

「涼しそうですね」

一方、観客席から二人の闘いを眺めていたエリアはそんなことを呑気に微笑んだ。

「いやいや、涼しい所じゃないでしょ。まったくあんたは……」

その隣でリネは呆れたように呟く。そして、その場で大きく欠伸をした。

「ふわぁ、と。どうやら決着着いたみたいだね」

視線の先には足元が凍っていて、震えている雪と、レノフ。リネ

は見てすぐに勝敗を悟った。

「やっぱりレノフの勝ちでしたか……」

エリアは予想通りの答えにうなだれる。その様子から外れて欲しかったのか、とリネは苦笑した。

「ざっんねーん。まあ、明日のトーナメントに期待してみたら？」

その言葉にエリアは顔を上げる。

「雪くんならきっとレノフにリベンジするよ」

悪戯に笑みを浮かべてリネはエリアを見詰めた。エリアは、数回瞬きすると「実はもう期待してるよ」と、微笑んだ。

リネはエリアの頭を撫でると、顔だけを雪とレノフの方に向けた。

「――私も期待しちゃおうかな……」

見る人に嫌悪感を抱かせるような、不気味な笑みを浮かべた。が、次の瞬間には、いつもの子供を思わせる笑顔に変わっていた。

「それにしてもあいつら楽しそうね……」

呆れたように呟く。

「笑ってる」

エリアもリネに続いた。

二人の視線の交わる先には、笑い合う二人がいた。レノフと雪だ。

雪は震えながら、レノフは眺めながら、声を上げて笑っていた。

23スープ

四人――レノフ、リネ、エリア、雪――は先ほどの闘技場から食堂へと場所を移していた。食堂内は空席が多く、雪達を含めても十人ほどしかいなかった。約七十人ほどが同時に利用できる食堂に十人しか人がいなかったので、雪は余計に広く感じた。

「……大丈夫です？」

「大丈夫だよ」

雪は毛布を纏い、震えながら答えた。横に座っているエリアは納得しなかったのか、心配そうにしている。

「本当にダイジョブ？　見てるこっちが寒いんだけど～」

雪の向かいに座っていたリネが言った。

雪は先ほどのレノフとの試合のせいで体が冷え切っていた、それで毛布に体を包んでいたのだった。しかし、なかなか体は温まらず、ぶるぶると震えている。

「温かい飯でも食べればよい」

レノフは雪に顔を向けた後で、カウンターに注文しに行った。

この食堂では、自分から注文しに行かなければいけない。もちろん、雪のいた世界みたいに出来上がりを知らせてくれる機器はないので、自分から料理も受け取りに行かなければならなかった。

「あ、私も注文しに行ってきます」

エリアは立ち上がると、レノフの後に慌てて着いていく。残された雪と、向かいに座るリネ。

「それにしても、あんたけっこうやるねぇ～」

リネは笑顔を雪に向ける。

「いや、全然ダメだろ。負けたしな」

対して雪は、サラっと返した。そして、大きくクシャミをして寒い、と呟く。

それを見て、リネは軽く笑った。

「でもさ、レノフとあれだけ戦えただけでも凄いよ」

リネは慰めるようでもなく、同情するようでもなく、感心するように言った。

「どういう意味なんだ？」

さっきまでとは違い、雪はムッとした表情を見せた。リネはそれを見ると再度笑った。

「だって、レノフは私達の兵級【ランク】……つまり、従騎士【エクスワイア】の中で一、二を争う猛者だからね」

まるで、自分のことのように自慢げに胸を張るリネ。凄いでしょ？　と目が語っていた。

しかし、雪は特に驚かなかった。

「それは……凄いことなのか？」

雪はまだこの世界に来て間もなく、自分がどの兵級【ランク】に入るのかも知らなかった。そんな状態なので、リネの言ったことの具体的な意味がわかっていなかった。

この世界に置いて、従騎士【エクスワイア】がどれだけ強い立場にいるのか……雪にはわからない。

「……知らないのぉ？」

怪しむようにリネが呟く。

リネは雪が異世界からきた人間だということを知らない。なぜなら、他の士官学校から転校してきたことになっているからだ。

なので、この世界の常識を知らない雪に対して、疑うような対応をしたのだ。

「……本当に知らないの？」

雪が無言のまま震えた――あまりの寒さに――）のを見て、リネはため息をついた。

「従騎士【エクスワイア】って言ったら騎士見習いだよ？　騎士様に一番近いの。わかった？」

リネがそう言うと、雪は「……わかった」と、納得したのかしなかったのか、言葉を濁しながら答えた。

その時、レノフとエリアがトレイを持ってやって来た。エリアのトレイの上には、温かいスープが４つ。レノフのトレイの上には肉

を野菜と混ぜて焼いた料理が大きい皿に載せられていた。

「けっこう食べたな」

「もう体は大丈夫なんですか？」

雪達は食堂を後にし、レノフとリネと別れた。そして、雪が明日通うかとになる教室へと向かっていた。

「大丈夫だよ。あのスープ飲んだら体が暖まってきた」

寒さに震えていたのが嘘のように、雪は元気になっていた。

二人は食堂から、A棟と呼ばれる校舎に向かって足を進めていた。雪がレンガでできている道の先に視線をやると、校舎が三つ並んでいるのが見えた。

「一番右にあるのがA棟です」

そう言って、雪の横にいるエリアが指を三つ並んでいる内の右端に合わせる。

「あれが校舎なのか？」

「はい。A棟、B棟、C棟。全部そうですよ」

エリアの解説を聞きながら、雪は遠くにある――徒歩で数十分ほどかかるだろう――建物を眺めた。

どの建物もビルのような形をしている。

しかし、日本にあるビルとは違い、窓は不規則に並びに、壁は白い。何かの石でできている。

「どうかしました？」

「いや、まさかあのデカイのが校舎とは思わなくてな」

雪がA棟を見るのはこれが初めてではなかった。

昨日、レビカドに遭遇するまで迷っていた時に一度見かけていた。しかし、その時には士官学校――つまり軍関係の施設だろうと雪は勝手に思っていた。それがただの“校舎”だったのだから雪にとって衝撃の事実だった。

もちろん、此処には戦いに必要な武器を保管したり、魔術に関する施設が存在する。ただ、目立たないよう地下にあるのである。雪はまだ知らないが。

「予想外ですか？」

エリアが雪の顔を見上げるように覗き込む。

「ああ、予想外だな」

雪はため息をつくと、歩きだした。エリアもつられて歩きだす。

「雪さんでも予想外できませんでしたか」

なぜだかエリアは得意げに雪を見た。

「……“俺でもって”どういう意味だよ……」

呆れつつも、雪は足を動かし続ける。

２４　教室―０１

人の気配がない廊下を二人は歩いていた。

「あ、ここです」

並んで歩いていた二人だが、急にエリアが雪の前にでた。そして、ある教室の扉に手をかけた。

「ここが私達従騎士【エクスワイア】の教室です」

説明するような、歓迎するようなエリアの声と同時に扉が開いた。中はかなり広く、一つ一つの教室が大きいから校舎があんなに大きいのか、と雪は思った。

教室の広さに対し机の数は少ない。机は横に長く、一つだけで五人は授業に臨めそうだ。教室内は、そんな机が幾つか置いてあり、あとは教卓が奥の方にあるだけだった。

エリアが教室に入ると雪も続いた。

「けっこう広いのな」

雪は教室内をぐるりと見渡し、天井を見上げた。天井も日本の建物のよりは高く、何やら絵が描かれていた。

「この絵……いいですよね」

エリアも雪と同じように天井の絵を見上げていた。その顔は穏やかで、語るように言葉を漏らした。そんなエリアを横目で見た後、

雪は改めて絵を見詰めた。

「この人達は神様の使いなんです」

その絵には、何人かの人間が描かれていた。緑一色の大地で踊っている。そして、空から黄金の光が降り注いでいる。

「神の使いって……天使か？」

余り感心のない声で雪が言った。その言葉にエリアは首を傾げた。

「なんですか、天使って？」

「違うのか」

「違いますよ」

クスクスと無邪気に笑うエリアの言葉に雪は「へぇ～」と呟く。予想が外れたことに関して何とも思っていないのだった。というより、異世界なのだから違っていてもおかしくはないのだ。つまり先ほどの問い掛けは雪の気まぐれである。

「んじゃ、神様ってのは神様なのか？」

雪は上げていた顔をエリアに向けた。

「はい。神様は神様です……よ」

自信なさそうにエリアが答えた。先ほどエリアが言った神様という言葉。それはこの世界にも、日本とよく似た思想があるというこ

とを示していた。

「もしかして……日本という国……にも神様いるんですか？」

エリアはそういうと、雪に迫り寄る。まるで、欲しい物に向かう子供のように。

「……一応な。ちょっと離れろって」

雪は言いながら、エリアを遠ざける。

「なるほど……」と呟いたエリアの両手には日本メモと表紙に書かれた手帳があった。どうやら、雪の話を聞いて日本に関する情報を記録しているようだ。

「神の使いね」

そう呟くと、雪は近くの椅子に腰掛け、机に体を預ける。

「希望の民」

メモを書き終えたエリアが呟いた。雪は顔だけをエリアに向ける。

「神の声を聞き、人々を陰から支えている……私はそう聞いてきました」

教師に成り切っているのか、エリアはハキハキと声で説明し始める。そして、まあ架空の存在ですけれどね、とエリアは苦笑した。

「何処も似たようなもんだな」

欠伸混じりに雪が言った。するとエリアは驚いて二、三度瞬きをした。

「え、えっと雪さんの言ってた天使というのも……」

「まあそんなとこだろう」

ちなみに雪は聖書を読んだことがない。更には天使について詳しくもない。ただ、雪のイメージした天使と……ということである。

「そうなんですか。異世界なのになんだか不思議ですね」

「そうだな」

結局人は人なんだな。世界が違っても。と雪は心の中で呟いた。

その時、ふと思いだしたのか雪は「そういやトーナメントって明日だよな？」と、焦る様子もなく呟いた。

「そうですよ」

エリアも焦る様子もなかった。ケロリと、サラっと答えた。

「大丈夫なのか？」

「何がです？」

エリアは目をパチクリとさせた。

「トーナメントだよ。エリアも出場するんだろ？」

「えっ～と、しませんよ？」

「しないのかよ」

戸惑いがちに答えたエリアに、雪は思わず声を出していた。

「わ、私は治療魔導師【ヒーラー】ですから」

治療魔導師【ヒーラー】というのは、文字の通りで治療についての魔術を扱う魔術師のことだ。なので戦闘には向かない。つまり、トーナメントにも出場しなくてもいいが、出場者の怪我を治療しなければいけないのだった。

「治療魔導師【ヒーラー】ね～」

治療魔術を見たことがない雪にはイマイチイメージが沸かなかった。当たり前だが。

「つまり、俺が怪我してもエリアが治してくれるんだな？」

難しく考えることは止めたのか、雪はエリアの顔を覗き込む。

「いや、私は魔術苦手なので……包帯でグルグルと」

「……おいおい」

雪は呆れたようにため息をついた。

25共鳴、反響。

エリアと雪は数十分間ほど取り留めのない話をした後、教室を出ようと歩きだした。その時、教室に一人の男子生徒――雪と同じ制服に身を包んだ少年――が入ってきた。

「何だ貴様」

入ってくるなり、その男子生徒は雪を睨みつけた。その眼差しは鋭く、表情全体で不快感を露にしている。

「いきなりなんだよ……」

雪は困惑の表情を浮かべた。男子生徒は雪から視線を横にずらすと、エリアに顔を向けた。

「アルケデ、こいつは誰だ？　僕はこんな奴を見たことがない」

早く教えろ、とエリアに重圧をかけるように男子生徒はそう言った。

「え、えと……雪さんです？」

「なんで疑問系なんだ？」

男子生徒は不満げだった。エリアは困ったように笑うと、雪の方へと目を向けた。

「植木雪だよ。んで、あんたは？」

エリアと目が合うと、めんどくさそうに雪が名乗り出た。そして、男子生徒の方へと首から上を向けた。

「……ハウル。ハウル、トルスト」

ハウルは静かに答えた。

ハウルと名乗った少年は、雪より少しばかり背は低くく、綺麗に整っているが、幼い顔つきをしている。髪の毛は真っ黒で、短くも長くもなくて耳が出ている程度に伸びている。しかし、癖があるのかグルグルと曲がりに曲がっていた。

そして、その腰には剣が下げられて、ハウルがどの兵種【クラス】なのかを表していた。

「んじゃ自己紹介も終わったし、行ってもいいか？」

ハウルは少しだけ考え込んで、雪の方に向いた。雪はそれを見て、怠そうにため息をつく。

「貴様は何者だ？　僕は従騎士【エクスワイア】全員分の顔と名前を知っているが……見かけないな」

「転校生だからだろ？」

ケロッと、さも当たり前のように雪は言った。もちろん、雪が異世界からきた存在であることは秘密だが、転校生であることもまだ知られていない。

ハウルはその言葉に眉間にシワを作った。

「……つまり貴様が昨日、侵入者を追い払った奴だな？」

ハウルの言う侵入者は、火燕、雷刃、水連、彼ら黒衣を纏った者達のことだ。雪が彼ら全員を追い払った訳ではないが、雷刃と戦っていたのをハウルは見ていた。

「追い払ったってより、応戦した感じだけどな」

残念ながらな、と雪は自分を嘲笑うようにぼやく。

「いえ、雪さんがいなければダメでしたよ」

そんな雪に、エリアは微笑みかけた。しかし、雪は納得がいかないのか、少しだけむくれた。

「そういうのはいいって」

「むう、本当です」

今度はエリアが不満げに雪に迫り寄る。

「……わかったよ」

諦めたような雪の言葉にエリアはすぐに笑顔になる。雪はため息をつく。

「おい、僕を無視するな」

ハウルは二人のやり取りが終わったのを言い立てた。

「別に無視してねぇよ」

雪は怠そうに答えると、近くの席に腰を下ろした。エリアも続いて、後ろの席に座った。

「てか、なんか用件でもあるのか？」

「ないと思うか？」

ハウルの切り返しに三人の間に沈黙が訪れた。ハウルは呆れた表情でひたすらに雪の顔を凝視する。

気まずさに耐え切れなくなった雪が咳ばらいをした。

「……改めて聞くが、何の用だ？」

「手合わせを頼みたい」

ハウルはそう言い放つと、雪の前の席に座った。そして、体を雪の方へと振り返る。

「手合わせねぇ～」

雪は言いながら天井を見上げる。こちらの世界に来てから、勝負を挑まれ続きな気がした。とはいえ、あちらの世界でも祖父と試合をしていたので、変わっていないかもしれない。と雪は心の中で苦笑すると、ハウルの方へと顔を向けた。

「んじゃ、一丁やりますか？」

そう言って雪は席を立つ。

「余程自信があるみたいだな」

ハウルは雪が迷いも無く了解したことが意外だったのか、挑発的な台詞だ。

「どうだろうな。……ところで、闘技場でやるのか？」

雪の言葉にハウルは「ああ」と頷く。

「エリアはどうする？」

雪はクルリと、エリアの方へと向き直る。エリアはキョトンとした後、「もちろん見に行きますよ」と力強く言った。

それを確認すると、雪は教室の扉を開けた。

「ちょっと待て」

その時だった。後ろからした声に雪が振り向く。すると、ハウルが雪に歩いて近づいてきていた。

「闘技場に行く前に少し寄りたい場所がある」

そう言うとハウルは雪の横を通り抜け、教室から出て行った。雪は後を追うために足を動かそうとする。

「雪さん」

しかし、エリアの声に雪は足を止めた。そして、振り返ると、エリアが納得のいかなさそうな顔をしていた。

「ハウルさんは何しに教室に来たんでしょう？」

首を傾け、頭の上にハテナを乗せているエリアの疑問に雪は「そういや、何しに来たんだろうな？」と考え込む。

「忘れ物だ」

すると、いつの間にか戻って来ていたハウルが早足で自分のロッカーに向かい、本を数冊を取り出した。

その表情は赤く、かなり恥ずかしいのか、二人ともと目を合わそうともしない。

「ほら行くぞ。サッサとついて来い」

そう言い捨てると、ハウルは教室から急ぎ足で出て行った。

残された二人は、何を話す訳でもなく、顔を見合わせて怪訝な表情を浮かべた。

「なんだ、あれ？」

雪はぽつりと呟く。

「ハウルさんって、案外面白い人かもしれませんね」

エリアは苦笑しながら教室の出口を眺めた。

26雪の後悔―貳

「ここって……」

雪達がハウルの後を着いて行くと、小さな小屋に着いた。木で作られているそれは、壁に人一人分ほどの穴が開いている。雪はその小屋に見覚えがあった。

「どうした？　さっさとついて来い」

小屋を見て思い出そうとする雪を尻目に、ハウルは扉を開いた。

「なんか見たことあるんだけどな……」

雪は渋々歩きだす。エリアも雪の後ろに続いた。

「当たり前だ。これに見覚えがあるだろう？」

小屋の中は薄暗く、木独特の匂いが篭っている。屋根の隙間――所々が腐っていた――から漏れる微かな光と、壁にできた穴が部屋の中唯一の光源となっていた。

そして、ハウルの指差す方向――小屋の奥――には一本の剣が置いてあった。

「思い出したわ」

壁にある穴は雪が雷刃と戦った時に開けたもので、雪はやっと思い出した。戦っていた時は必死だったのでぼんやりとしか雪は覚えてないが。

「えっと、あれ何です？」

懐かしむように、どうでもよさげに小屋の中を眺める雪を置いて、エリアはその一本の剣を指差した。

誰もが息を飲むであろうほど真っ黒。その剣には装飾の類は無い。そして、その刃は天井から漏れる日の光で、鈍く輝いていた。

「アルケデにしては珍しいな。授業で習っただろう？　闇器（ダークレセプター）だ」

怪訝な表情を浮かべるエリアにハウルは答える。エリアは従騎士【エクスワイア】の中で筆記試験の実力は常にトップクラスだ。なので、ハウルにとって意外だった。

「……そういえば習いましたね」

エリアは乾いた笑みを浮かべた。ちなみに、エリアはその科目のところを睡眠学習していたので、覚えていなかったのである。

「なんだそれ？　この剣の名前か？」

そして、聞き慣れない単語に雪がハウルの顔を見た。

「違う。まったく……それでよく扱えたな」

皮肉めいた台詞と共にハウルはため息をついた。

この剣は、雪が雷刃と戦った時に使用した剣である。あの戦闘を終えた後、アヌラスに言われて戻した。雪は今の今まで忘れていた

ようだった。しかし、一目見た瞬間から思い出したようだ。
ただ、その剣が何であるかは知らなかった。もちろん、異世界の住人ゆえにである。

「この剣にはちゃんとした名前がない。闇器（ダークレセプター）の中の一つだ」

「闇器（ダークレセプター）ってのはなんだ？」

雪の質問に、ハウルは嫌そうな顔をしつつ口を開く。

「闇器というのは、誰が創造したのか、何の為にあるのか、今だにハッキリとしていない」

ハウルは転校生である雪に対して呆れていた。
授業で習わなかったのか、と。そして、何故そんな人物がこれ（・・）を扱えるのか？　不満で仕方なかった。

「わかっているのは人間には扱えないということだけだ。わかったか？」

「おいおい」

ハウルが長々とした説明を終えると、雪はあからさまに嫌らしい顔をした。

「俺は人間じゃないってか？」

「……そうとは言ってない」

ハウルは雪を睨みつける。

「んじゃ、どういう意味だよ」

「……今まで扱えた人間が居ない」

雪の言葉にハウルが素っ気なく答えた。その言葉に雪は驚きを隠せなかった。

「……扱えないって。剣は剣だろ？」

雪は剣の正面に歩み寄ると軽々と引き抜く。そして、ハウルに対して疑うような眼差しを向けた。

「雪さん凄いです」

雪の後ろにいたエリアが微笑む。

「その剣に僕達は触れない」

ハウルが、ゆっくりと雪に近づく。そして、雪の手にしている剣に手を伸ばすが、空中で静止してしまう。

「何やってんだ？」

それを見て、雪は目をパチクリとさせた。

「触れない。そう言っただろう」

「そう言われてもな」

雪から見れば、ハウルが途中で手を伸ばすのを止めたようにしか見えなかった。

唐突に、雪は右手でハウルの左手を掴むと、左手で持っている剣の刃に押し付けた。しかし、まるで同極の磁石を近付けた時のように、反発してハウルの指先は刃に触れない。触れることができないのだった。

「満足したか？」

ハウルは雪の手を払った。

「……まあ、一応」

信じられない出来事に雪は心の中で、此処は異世界、此処は異世界と呟き、落ち着こうとする。

「ところで、なんでここに寄ったんです？」

来た時から疑問に思っていたのか、今思い付いたのかエリアが首を傾げる。

「これを取りに来た」

ハウルはサラリと答えた。そして、雪の方へと顔を向ける。

「僕はその剣の力が見たい。だから貴様と手合わせをする」

ハウルの言葉に雪は、視線を手元に移す。そして、数秒間考え込む。

「……なるほどね」

先ほどの状態から落ち着いたのか、雪が呟く。

「そういう狙いね」

「済まないな、僕の我が儘に付き合わせてしまって」

悪びれた様子もなく、ハウルが言った。

「絶対悪いと思ってないだろ？」

「さあ、どうだろうな」

ハウルのすました態度に雪は疲れたため息をつく。

「それじゃあ、用も済んだ。闘技場に向かうぞ」

それだけ言い捨てると、ハウルはスタスタと雪とエリアを置いて行く。

「雪さん頑張って下さい」

エリアはニカッと笑い、「行きましょう」と雪の前を歩き出す。

「頑張りますか」

怠そうに呟くと、雪は剣を左肩に乗せてエリアの後ろに着いて行った。

27風脚

雪は何げ無く辺りを見渡した。とてつもなく広い闘技場の舞台(ステージ)には所々に雪が積もってあった。それを見て、雪は先ほどの戦闘を思い出していた。

先ほどの戦いでは、真剣を使わなかった。安全に勝負することができたが、今回はそうはいかない。ハウルの要望に応え、闇器である剣を振るわなくてはいけないからだ。

「サッサと始めるぞ」

ぼけっとしていた雪にお構いなくハウルは剣を抜く。

「……けっこうせっかちなのな」

渋々と雪は剣を構える。　しかし、その表情にやる気ない。

「闇器の力、見せてもらおう」

ハウルが剣を両手で正面に持ってくる。そして、雪を睨みつける。

「あんたが見るのは俺の力かもな」

言うより早く雪が走った。対して、ハウルは動かない。

雪は、ハウルがじっとしているのを確認すると、そのままの速度で剣を前に突き出した。

「怪我すんなよ」

雪の言葉を聞いてか、ハウルの眉が少しだけ動いた。

次の瞬間には雪の攻撃を受け流し、ハウルが剣を振り下ろす。前のめりに体勢を崩していた雪はなんとか体を外側に捻り、その刃を躱(かわ)した。そして、体を捻った勢いを使いハウルの足元を払う。

ハウルは舌打ちをすると、バク宙して距離を取った。　着地すると、剣先を力無く地面に向ける。

「……少しはできるようだな」

「今ので少し……なんだな」

雪の表情は相変わらずやる気に欠けていたが、先ほど――剣を交える前――に比べると少し目つきが鋭い。そして、雪はその目でハウルの顔を眺めてから視線を下げた。

「けっこうよさ気な剣だな」

視線の先にあるのは、ハウルの手に握られている一本の刃。

手元は刃の幅が二十センチメートルほどあり太く、剣先に向かうにつれて細くなるという形をしている。剣の表面と柄の部分には、小さな宝石と彫刻により装飾が施されている。

芸術品ともいえるほど綺麗なそれは、高級感を漂わせている。しかし、所々刃こぼれしていることが鑑賞用ではないと主張していた。

「……チンクエディア。僕のお気に入りだ」

ハウルはそう呟くと、剣を構える。

そして、雪に向かって素早く近づくと切り掛かる。

下から切り上げ、剣を止めず体を一回転させ、横に一閃。目にも留まらぬ早さで剣撃を繰り返す。それを雪は、剣で押し返す。

ハウルの一撃は軽く、雪の剣でたやすく弾くことができた。しかし、手数が多かった。そのせいで、雪は反撃することがなかなかできない。

そして、急に早まったハウルの動きに雪は距離をとろうとする。しかし、ハウルがそれを許さない。

いくら弾き返されてもすぐに詰め寄る。

雪が苦し紛れに大振りに剣を薙ぎ払う。そこにハウルの姿は無く、剣は虚しく空(くう)を裂いた。

次の瞬間、雪の視界に朱い飛沫がちらついた。右肩が切り付けられたのだ。

雪は苦痛に顔を歪ませながら、本能的に、反射的に、剣を振り上げた。

剣は雪の真上に跳んでいた、ハウルを捕らえた。ハウルはとっさに剣で防ぐが、空中なので、衝撃までは防げない。

鈍い音と共にハウルは吹き飛ぶと、地面に叩き落とされる。

「チェックメイト……ってか？」

咳込み地面に転がるハウルの顔に影が掛かる。見上げると、雪が悪戯っ子のように笑っている。そして、ハウルの鼻先に剣先を置いていた。

「まだ終わってはいない」

それを聞いて、雪はキョトンとした表情をした。ハウルはそれを見て、怪しく笑みを浮かべて口を動かす。

「失せろ……『インビジブル（見えない衝撃）』」

ハウルが重く呟く。

「は？」

ハウルの言葉に雪が首を傾げた。しかし、それも刹那、雪の体に衝撃が走る。

何が起こったのか、雪にはわからなかった。気が付けば、空を舞っていた。雪は体勢を整えつつ地面に着地すると、くらくらする頭を無視して状況を把握しようとする。

先ほどハウルの使用した魔術――インビジブル（見えない衝撃）は風の魔術だ。風圧により相手を吹き飛ばす。

もちろん、そんなことを雪は知らない。雪には見えない何かにぶつかったと感じられた。

ハウルはゆっくりと立ち上がり、服の汚れを払う。その動作には

余裕が感じられる。

「今の魔術か？」

そんなハウルに、肩で呼吸をしながら雪が問い掛ける。

「魔術が珍しいか？」

ハウルが静かに答える。雪は右肩を左手で抑えると、「また魔術かよ」とぼやいた。

「剣では負けたようだが……今度は魔術だ」

ハウルは剣を逆手に持つと力無くだらりと垂らし、詠唱し始める。雪は魔術の発動を阻止しようと駆ける。

「消え失せろ……『エアロカノン（空気の砲丸）』」

しかし詠唱文が短く、あっさりと発動してしまう。雪は魔術の発動に警戒し立ち止まる。

ハウルの目の前に出来た砲丸ほどの空気の塊。見えない上に飛んでくるそれを雪は転がり、間一髪躱した。

数秒後、空気の塊は、雪の遥か後ろの壁に当たり大きな音をたてた。

「どうした？」

形勢が逆転し、ハウルがゆっくりと声を掛ける。

しかし、雪には返す言葉も余裕も無かった。

「貴様の力はそんなものか？」

ハウルは雪を睨みつける。

この世界において魔術は強大な力。しかし、それは正当な力である。異世界から来た雪や、魔術の使えない人間からすると反則じみていたとしても。

“使える側”と“使えない側”。力の差は歴然で、勝敗は火をみるより明らかだった。

「……貴様の力はその程度か」

もう終わりか、期待していたのに、とでも言う風にハウルは呟く。

雪は空いている拳を強く握り締める。

「闇器の力はそんなものか？」

落胆したようにハウルは、闇器に視線を移す。

雪は、ハウルの言葉で、今更ながら自身の掴んでいる物がこの世界において特別であることを思い出した。誰にも扱えなかった剣。未知の剣。

もしかすると、ただのナマクラ、或は黒いだけの剣。しかし、もしかすると、不思議な力が秘められているかもしれない。誰も知らないこの刃には何かが隠されているのか。

雪は吸い込まれそうなほどの黒を、じっと見詰めた。

28　壁

二人の間に小さな風が吹く。闇器である剣を見詰める雪をハウルは待つように佇む。
そして、風が止む。雪が顔を上げた。その目はしっかりとハウルを見た。

「こいつ（・・・）次第だな」

そして、剣を左肩に担ぐと右手の親指で指した。雪はニヤリと笑っている。まるで、挑発するような態度。
ハウルは怪訝そうな表情になると、ゆっくりと剣を鞘に収めた。

「期待した僕が馬鹿だった……か」

まるで自身に言い聞かせるような呟き。ハウルはため息をついた。

「剣としては使えるけど……使い方なんかしるかよ」

雪はハウルの態度に不満を漏らす。それもそのはず、雪はつい最近その剣を持ったのだから。異世界の人間なのだから。この世界の人間が知らないことを知っている訳がなかった。

「……終わりにしよう」

静かに告げる。その声は雪に、冷たさを感じさせた。

少しの沈黙の後で、ハウルが詠唱を始めた。ハウルの体が光に包まれる。

「風よ」

雪は軽く舌打ちをした。今の内に攻撃をしかけて、魔術の発動を阻止してもよかったが、雪はその場で構えていた。

なぜなら、詠唱がいつ終わるかわからない雪は、迂闊に近づくことができないからだ。もし、魔術が発動した時にハウルの近くにいれば、確実に大きな怪我を負ってしまう。雪は、魔術発動後の隙を狙うことにしたのだった。

「槍となりて我と遊べよ、彼と戯れよ……『ブラストジャベリン（風を纏う槍）』

数秒後に、ハウルの目の前に槍が三本現れた。ガラスのように透き通っているが少し白く、先が三又に分かれている。一メートルほどの槍。

まるで最初からそこに浮いているかのように音も無く存在していた。そして、それは先を雪に向ける。

風を切る音が辺りに響いた。雪は咄嗟に横に跳んだ。

次の瞬間には、先ほどまで雪がいた地面がえぐれていた。

更に残り二本の槍が雪に向かう。雪の体はまだ宙に浮いているため、身動きができない……はずだが、雪は剣を地面に刺して無理矢理自らの軌道を捻じ曲げる。

それにより、二本目は雪の横腹を掠めた。

掠めただけだったが、雪が着ていた服は破れ、槍を中心に渦巻く風が雪にしっかりとダメージを与えていた。

雪が膝を着く。そこに三本目の槍が向かう。しかし、先ほどのダメージにより雪は動けない。ただ、地面に刺さった剣を盾代わりにするだけだった。

音をたてて飛んでくる槍。到底防ぎきれそうにない。吹き飛ばされるかもしれないが、なにもないよりはマシだった。

雪はギュっと、柄を握る。風を切り、突き進む刃は黒い剣に向かう。だが、互いが触れる直前に槍は裂け、風は消えた。まるで、鋭利ななにかで切り裂かれたかのように。

「なんだとっ？」

終わりだろうと思っていたハウルは驚いて、声をあげた。かなり攻撃のある――剣や盾すらも一撃で粉砕するであろう――魔術がきかなかったのだ。しかも、音も無く、最初からなかったかのように。

「どーゆうことだ？」

雪はゆっくりと立ち上がると、首を傾げた。雪にも事態が飲み込めていない。

そんな雪にハウルは不快感を表にする。

「僕が知るか！　貴様が何かしたんじゃないのか？」

ハウルに言われても、雪には心当たりがなかった。自分は何もしていない。魔術は使えないのだから。と、そこで一つの可能性が浮

かび上がった。

「もしかして、こいつか」

ハウルに聞くように、雪は左手を柄の先に置いた。今だに地面に刺さっている黒い剣。ただの剣ではなく闇器。伝説の武具の一つである。

「……魔術を打ち消せるのか」

ハウルが視線を落として呟く。どうやって、魔術が防がれたのかかわからないが、あの黒い剣が原因だろう。むしろ、それ以外に原因になりえそうなことがなかった。

「ふん……試してみるか」

ハウルが目をやると、雪が剣を抜く。そして体の前で構えた。まだ勝負は続いている。互いに気合いを入れ直す。

「風よ」

ハウルが詠唱しだすと、雪は走りだす。これはさっきと同じ詠唱文――つまり先ほどの魔術だ。発動するタイミングはわかっていた。雪は発動までに間に合うだろうと、ハウルに向かう。

が、しかし、体に走る痛みが動きを鈍くする。駆け出し始めた足が止まり、その場に膝を着く。。間に合わない。雪はそう思い、魔術を迎え撃つことに決めた。手に持っている黒い剣を信じて。もし、魔術を打ち消せなかったら……そんな考えが頭をよぎる。しかし、これしか道はない。ならば、余計なことは考えるな。自分自身にそ

う言い聞かせる。

「槍となりて我と遊べよ、彼と戯れよ……『ブラストジャベリン（風を纏う槍）』

ハウルの声に応えるよう、共に風の槍が現れる。その切っ先には膝を着いた剣士が一人。雪は、剣の柄を握りしめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2400k/

異世界物語＋

2011年8月10日20時35分発行